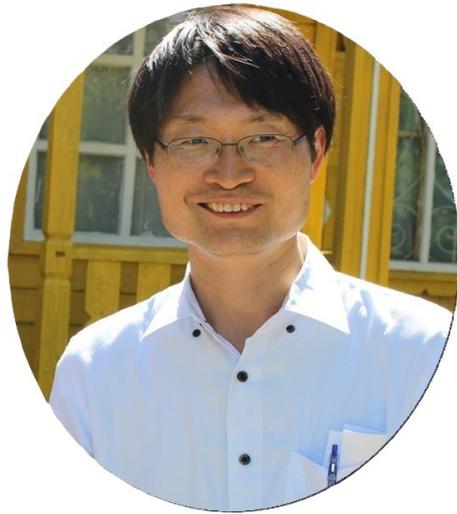


SLAVIC-EURASIAN RESEARCH CENTER NEWS

No. 171 April 2024

新センター長から

世界が大きく変わりつつあるこの時期にセンター長となることは大変光栄でありつつも、その責任の重さに身が引き締まります。2022年2月のロシアによるウクライナ侵攻でポスト冷戦期の世界秩序が終わったとの見方は広く共有されていますが、私は現代世界の危機がもっと深層の地殻変動ではないか、つまり19世紀末に遡る「長い20世紀」が現在、終焉を迎えているのではないかと考えています。私見は、岩波書店の『思想』2024年4月号で展開しましたので、御笑覧いただけましたら幸いです（もちろん、組織の見解を代表するものではありません）。



センターは国立大学の新しい中期計画が始まる2022年度から5年間、「生存戦略研究」というプロジェクトを立ち上げ、スラブ・ユーラシア研究が積み重ねてきた知見を現代世界の危機の理解に応用することで、旧ソ連・東欧地域の人文社会科学研究に新たな使命を吹き込んでいます。昨年末には、北大のスタートアップ支援を得てウクライナ及び隣接地域研究ユニットを設置しました。また、人間文化研究機構（NIHU）より東ユーラシア地域研究のプロジェクトを受け入れ移民・ジェンダーをテーマに研究を深め、北極域研究と境界研究を通じて、部局横断、産官学協働、知識の社会実装を推進しています。教育面では、2021年度よりロシア・東欧学会（2022年度からは日本ロシア・東欧研究連絡協議会 [JCREES]）とサマースクールを共催して、学部生から大学院生、ポスドクから定職者まで切れ目なく人材を育成する機能を高めています。

日本の人文社会研究をとりまく厳しい環境の中で、これらの活動を持続するために我々は自分たちの存在意義を証明しなければなりません。そのためにはセンター自身が変わり続けなければなりません。とりわけ、研究と教育の国際化はすでに不可避です。野町前センター

長のご尽力で、教員、客員教員、共同研究の公募も海外に門戸が開かれ、これまで以上に国際的な共同利用・共同研究拠点になるという方針が打ち出されました。これは言うまでもなく、スラ研だけで成し遂げられるものではありません。各種公募も将来は、日本人の研究者と海外の研究者が横並びで英文の申請書を書き、それを日本人だけでなく海外の指導的な研究者が判定することになるでしょう。そこでは日本人も、海外で通用する英作文の技術を身につけるだけではなく、何よりも研究内容を国際的な水準に引き上げていかなくてはなりません。センターが国際的な共同利用・共同研究拠点になることはセンターの生き残りに不可欠ですが、そのためには、日本のスラブ・ユーラシア研究者に国際的な競争に入っていく覚悟が求められます。スラ研の敗北は、日本のスラブ・ユーラシア研究の敗北となるでしょう。

覚悟とはいっても、何も恐ろしいことを言っているわけではありません。国際的に競争力のある研究は、結果的にそうなのであって、最も大切なのは、どこまでも好奇心に貫かれた探究です。ウクライナ戦争に際して日本のスラブ・ユーラシア研究者が即応的に必要な知見を提供できたことは、それまでの研鑽と蓄積の賜物です。しかし、スラブ・ユーラシア地域、そして世界を待ち受ける将来の試練に備えるには、ただちに役には立たずとも、妨げられることのない好奇心が知識の地平を切り拓いていくことが絶対に必要です。スラ研はまず、性別、世代、国籍、専門の異なる多様な人材が互いの好奇心を通わせることのできる環境づくりに努めます。その上で、産官学の協働を推進し、社会の役に立つ知識の発信にも努めます。スラ研は、好奇心で結束し、さらなる高みをめざす共同体になります。[長縄]

研究の最前線

生存戦略研究全体集会「脱植民地を考える」開催される

ウクライナ戦争をきっかけに、スラブ・ユーラシア研究が暗黙に前提としてきたロシア中心主義的な見方をどのように克服すべきかが問われています。さらにウクライナ戦争は、欧米のロシア非難・制裁が西側の外ではあまり広がりを持たず、むしろやはり白人を優遇しているという冷めた態度が見られることも明らかにしました。昨年10月にはじまったハマスとイスラエルとの戦争は、再び西側のダブルスタンダードや偏りを証明しています。これらのことからすれば、問題は単にロシアを「脱植民地化」するだけでは足りず、もっと広く欧米中心の世界認識自体をトータルに「脱植民地化」する必要があります。そこで今回は、これまでも「脱植民地化」や帝国の遺産について考えてきた東アジア、東南アジア、南アジア、中東の研究者の協力を得ました。そして、ディシプリンを越えてこれらの地域で蓄積されてきた知見や議論に学びながら、スラブ・ユーラシア研究でどのような新しい地平が開けるのかを考えました。研究会は、対面とZoomを組み合わせて行い、参加者は会場27名、オンライン49名でした。

今回の議論で明らかになったのは、スラブ・ユーラシア研究の「脱植民地化」も全く予断・楽観を許さないということです。一つの帝国が過ぎ去っても別の帝国が世界秩序の再構

築を伴ってやってきます。帝国後に生まれた国民国家にしても、エリートや統治制度が帝国の遺産や記憶を継承します。旧宗主国との人的つながりや物流は、続けざるを得ない状況があります。国内のマイノリティに対して、国民国家も近代帝国とさほど変わらない態度を示します。今回の研究会は、現象としての脱植民地化の分析が中心になりましたが、それは地域研究自体の存在意義を問うことにもつながるよう感じられました。Dipesh Chakrabarty



南アジア・中東のセッション

の *Provincializing Europe* などが示しますように、ヨーロッパ起源の理論も時間と場所の制約から免れません。地域研究は、欧米中心の大きな理論やナラティヴを解体するための様々な例外・反例のエピソードを提供するだけなのか、それともヨーロッパと同じく時間と場所に規定された地域の研究が、オルタナティブな理論やナラティヴを紡ぎだすことができるのか、といった問いが今後ますます重要になってくると確信しました。[長縄・村上]

東アジア・東南アジア

福原裕二（島根県立大学）「メタフィクション国家・北朝鮮：脱植民地化の限界」

野入直美（琉球大学）「沖縄の軍事化と“脱軍事化”：アメリカンを中心に」

鈴木絢女（同志社大学）「東南アジアの『脱』植民地化：政治経済の粘性と中立主義外交」

モデレーター：岩下明裕（SRC）

南アジア・中東

竹中千春（立教大学）「インド・ナショナリズムの軌跡：ポストコロニアル、ポスト社会主義、グローバル・サウス」

酒井啓子（千葉大学）「中東地域研究から国際政治を見る：植民地支配と冷戦の遺恨」

細田和江（東京外国語大学）「ポスト・シオニズム文化としてのイスラエル文学」

モデレーター：黒木英充（SRC / 東京外国語大学）

スラブ・ユーラシア

樋渡雅人（北海道大学）「地域性と経済開発：ウズベキスタン住民の生存戦略」

赤尾光春（国立民族学博物館）「脱植民地化の身振りとしての笑い：現代ウクライナの風刺文化と対ロシア戦争以降の変容」

大石侑香（神戸大学）「『国家の<余白>』で装う：西シベリア・ハンティの統治空間と毛皮動物生態資源」

モデレーター：宇山智彦（SRC）

ウクライナおよび隣接地域研究ユニット全体集会 「Russia's War against Ukraine and the Crisis in Eurasia -Challenges for the Humanities」

2023年11月14日付で「ウクライナおよび隣接地域研究ユニット（Research Unit for Ukraine and Neighboring Areas（通称：ウクライナ研究ユニット Ukraine Research Unit）が発足したことは前号のセンターニュースでお知らせをいたしました。ユニット発足を受け、2024年2月8日に、私たちはさっそく、そのキックオフの集会を開催しました。前半は、スラブ・ユーラシア研究センターに外国人研究員制度（FVFP）で滞在中のミコラ・ユーリー・リャブチュク先生と、さらに、今回のシンポジウムのために招へいた黒宮広昭先生に講演を依頼し、後半は、ウクライナの問題を「ユーラシアの人道危機」という枠組みで考えるため、黒宮先生に加え、アルメニアのエレバンからコーカサス研究所所長のアレクサンドル・イスカンダリャン先生、慶應大学の錦田愛子先生を招いて討論会を行いました。

2022年2月のロシアによる全面的侵攻から2年が経過しましたが、侵略戦争は継続しています。ロシアの侵攻がもたらした衝撃によって、学術的な研究対象の認識の仕方、研究のアプローチ、理解のフレームワークは大きく変化しました。とくに、モスクワやペテルブルクなどの「ロシア」の中心から、ユーラシア大陸に住む多様な民族集団を見るという、ロシア（ロシア語）中心的な見方が反省を促されています。二つの講演は、まさに、私たちがいかにウクライナの存在や、ウクライナに住む人々の主体性を軽視してきたかについて、改めて注意を喚起するものだったと言えます。

リャブチュク先生は、帝国の「ユニークな」歴史的役割を称揚し、従属国の文化を軽視ないしは不可視化するような「ナラティヴのシステム」を「帝國的な知」と呼びます。そして、多くの西側にいる「リアリスト」たちもまた、こうした帝国主義的世界観を共有している（「帝國的親近性」）のだ、と言います。黒宮先生もまた、ロシアとウクライナがルーツや文化を共有しているという、「ロシアの歴史ナラティヴ」を多くの研究者が鵜呑みにしてきたことを批判します。

黒宮先生はさらに、ニコライ・トウルベツコイを引用し、「ユーラシア文明」と「ヨーロッパ／西側文明」という枠組みでロシアとウクライナを対比しトウルベツコイによれば、ウクライナは「コサックのアナーキーと隣り合わせの国家ミニマリズム」を特徴とするのに対し、ロシアは「全ルーシ国家建設」（注：ロシア・ウクライナ・ベラルーシを統合する国家）をめざす「国家マキシマリズム」を特徴とする—、ウクライナは周辺化されているもののヨーロッパの一部なのであり、アイデンティティ・クライシスが生じないが、ロシアはそもそも「西欧化」が必要であったという意味でアイデンティティ・クライシスがある、と論じました。

議論では、歴史学における昨今の帝国論的転回が明らかにしてきた、帝国内の諸民族と帝国との複雑な関係性をどう捉え直しうるのかという問題、文化的な連続性の問題（イスカンダリャン先生は具体的にウクライナのコサックとクバンのコサックの文化的境界について質問されました）、さらに「ヨーロッパ」と「ユーラシア」を地理的な対比を伴う価値的対立と見ることの問題点、特にそれらが境界地域で引き起こしうる衝突、学問と教育の枠組みに対する新しい問題状況の反映のあり方など、フロアとの熱気を帯びた議論が続きました。

ロシアが歴史的に力をもった地理的空間をどう見直すのか（そもそも「ロシア」とは何かも含め）、各分野においてさらに考えていく必要がありますが、諸民族や境界地域の存在感やその主体性を軽視することは、もはやできないということをはっきりしていると感じられました。

パネルの終了後、黒宮先生と少し立ち話をしました。私が、ウクライナの方はいまや「ユーラシア」に含まれると考えるのを嫌がりますね、と言ったところ、「そりゃあそうですよ、ユーラシアというのは旧ソ連圏の言い換えでしかなく、現在のロシア連邦の勢力圏を意味しますからね。だから私は、ASEEES（Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies）への名称変更には反対したんですよ」とお答えになりました（注：2010年に旧来の American Association for the Advancement of Slavic Studies (AAASS) から改称した）。しかし続けて、「ここ（スラブ・ユーラシア研究センター）の「ユーラシア」はいいんですよ、実際、インドや中東も含めて扱っているんですから。何の問題もないと思いますよ」と付け加えられました。確かに私たちの研究対象は旧ソ連圏を越えています。そのことで「ユーラシア」のもつロシア中心主義を免れているとしたら、先見の明があったと言えるのかもしれませんが。

続くラウンドテーブルでは、ウクライナの問題をよりグローバルな文脈で理解するために、さらにユーラシアで生じている二つの危機—ナゴルノ・カラバフとパレスチナ—をあわせて、「ユーラシアの人道危機」と捉え直して理解するとともに、人文系の研究者に何ができるのかについても議論をしました。黒宮先生は情報操作やプロパガンダによって意思決定の誤りが起こることを警告しつつ、研究者が社会に関わる必要は特になが「真実を語る」責任はあることを強調されました。イスカンダリヤン先生はナゴルノ・カラバフでの紛争の経緯を説明しながら、18世紀に西欧が生み出した「国家建設をエスニック・ドメインの構築」と捉える見方は、恐ろしい結末、すなわち「異質な」住民の浄化につながる、と述べ、21世紀の新しい考え方の必要性を訴えました。最後に錦田先生はパレスチナで起こっている非人道的な出来事を豊富なデータを示しながら語りつつ、国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）の活動の重要性および、メディアでの「歪みのない」情報の発信や NGO との共同など研究者のパブリックな場での役割を強調されました。討論では「真実」の多様性の問題、ウクライナでの戦争の影響や捉え方の差、異なる見解をもつ研究者の間の対話の問題など、多様な角度から意見を交換しました。この三つの出来事はコンテクストを共有していると思うか、との問いに対して、イスカンダリヤン先生が、これはすべてヤルタ体制の解体から生まれている、とおっしゃったことは印象に残りました。前日の生存戦略研究全体集会において、竹中千春先生が言及された帝国の失敗した撤退の後に生じる地域の不安定化の問題、酒井啓子先生が述べられた旧「植民地」の主体的な動きをどのようにサポートできるのかという問題、さらに、細田和江先生が指摘された、旧「植民地」の新生国家から漏れ出てしまうさらなる少数民族にどう目を向けていくのかという問題など、「脱植民地化」に関連してなされた議論も改めて思い起こされました。私たちは、「帝国」からの境界地域の離脱とともに、「帝国」がいったん引いた後に起こる諸問題も含めて、ユーラシアの今後を考えていかねばなりません。

シンポジウムに先立って、2月6日に、黒宮先生との懇談会を非公式に行いました。黒宮先生は東京大学で修士号を取得した後、渡米してプリンストン大学で博士号を取得され、1988年に最初のモノグラフを発表されました。その最初の著作ではいわゆる「レヴィヨニスト」的な枠組みでご研究されていたのに対して、10年後の1998年に発表された『ドン

バスにおける自由とテロル』では、アプローチが大きく異なり、モスクワ中心史観を脱構築するようなユニークな地域史を採用されましたが、それは何故かとお伺いしてみました。すると、その変化に大きな影響を与えたのは、ウクライナの文書館での資料調査だったとおっしゃられました。「私はウクライナに教わったのです」と。その後のご研究は多方面に広がるのですが、通底するのは徹底した資料批判です。懇談会では、「モスクワ」は資料を選別して出す（あるいは出さない）ということ、したがって、ロシアで資料が見られないからといって決定的なダメージにならない（逆に言うと、モスクワの資料を見ているからといって公正な学術的調査ができているとは限らない）ということ、タイプされた資料は上司に向けた報告書でしかないの、それを読むだけでは「真実」には近づかない（手書きのメモまできちんと読む必要がある）ということ、インタビューをする場合、語られた言葉の含意を理解する必要があること、などを多様なご経験からお話いただきました。資料の嘘と裏を見抜く力をつけなければいけないということ、資料を構築しているコンテクストを、資料の側から、資料に基づいて再構築しなければいけないということを改めて深く考える契機となりました。最後に、黒宮先生は大きな枠組みをもってご研究されていますか、との質問に対して、とくにそういうものはありませんが、スターリン期はあれだけたくさんの方が死んだのに、よく分かっていないことが多いのです、だから研究しなければいけない、とおっしゃったのは心に残りました。黒宮先生を貫くもう一つの軸は、声なき者の声を聞くということ、文書館の資料にひたすら向き合い、文字資料を残さない犠牲者の内面にまで到達しようとする先生の姿勢は、人道危機の時代の歴史研究の真摯さとして深く印象的でした。[青島]

Plenary Meeting of the Research Unit for Ukraine and Neighboring Areas

Russia's War against Ukraine and the Crisis in Eurasia - Challenges for the Humanities

February 8, 2024, 13:00-17:50

Venue: 403, Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University and Zoom Webinar

Hosted by: Research Unit for Ukraine and Neighboring Areas, Platform for Explorations in Survival Strategies at the Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University

13:00-13:10 Opening Remarks: Yoko Aoshima (SRC)

13:10-15:50 Two Lectures on Ukraine

13:10-14:25

Mykola Yuri Riabchuk (Institute of Political and Ethnic Studies, Academy of Sciences of Ukraine, Ukraine / SRC) "Mapping a "Nowhere Nation": Imperial Knowledge and Challenges of Decolonization"

Moderator: Tomohiko Uyama (SRC)

14:35-15:50

Hiroaki Kuromiya (Indiana University, USA) "The History of Ukraine in the Light of Russia's War against Ukraine"

Moderator: Norihiro Naganawa (SRC)

16:10-17:40 Roundtable: Humanities Before Humanitarian Crisis

Hiroaki Kuromiya (Indiana University, USA) “Rising to the Occasion and Telling the Truth in Russia’s War against Ukraine”

Alexander Iskandaryan (Caucasus Institute, Yerevan, Armenia) “Ethnic Cleansing of Nagorno-Karabakh as a Means towards Territorial Integrity”

Aiko Nishikida (Keio University, Japan) “Denouncing Human Rights Violations in Israel-Hamas War”

Moderator: Yoko Aoshima (SRC)



ミコラ・ユーリー・リャプチュク先生の講演



座談会の様子



全体集会終了後の記念撮影

夏期国際シンポジウム開催予定

2024年7月18日(木)、19日(金)に、スラブ・ユーラシア研究センターにて国際シンポジウムを開催する予定です。テーマは、「The Crucible of a New World? Russia’s Borderlands at the Dawn of the Twentieth Century (新世界の坩堝？ 20世紀夜明けのロシア境界地域)」です。ロシアの境界地域は、たんに中央から抑圧され、翻弄される周辺的な存在だったのではなく、独自の新しい世界の発生の場だったのではないかと考えます。ロシア帝国の統治の手綱が緩んだとき、ロシア帝国が数々の変革を試みたとき、次の時代を予見する新しい動きが多様な特徴をもつ境界地域から数多く生まれていたはずだと考えます。境界地域からユーラシア大陸を横断する新しい20世紀史の幕開けを考えます。現在、プログラムを鋭意策定中です。ご期待ください！ [青島]

生存戦略研究

センターと部局間協定を結んでいるユニバーシティ・カレッジ・ロンドンのスラブ・東欧学研究所（SSEES）の教員と、昨年12月11日にワークショップ「Ends of Empires: Crisis and Resilience in the Long Twentieth Century」を開催しました。センターからは、青島陽子研究員、黒木英充研究員、長縄が参加しました。「長い20世紀」「ポスト・オスマン空間の宗教と民族」「ウクライナ戦争における脱植民地化と帝国の誘惑」という三つのセッションを設けました。

第一セッションは、Beneš氏が国家による農業のコントロールと農民運動との関係に着目して帝国の盛衰のグローバル・ヒストリーを提示し、長縄が抵抗者の地下茎と彼らの国家としての発芽という動態からロシアと中東のトランスナショナル・ヒストリーの提示を試みました。両報告は期せずして、国家権力と抵抗者との弁証法的関係（dialectic）として20世紀を考えるものになりました。農民は、入植者として移動する場合もあるものの、基本的には土地に縛られたイメージがあるので、Beneš氏が同時代的な比較と連関を示されたのはとても刺激的でした。両報告からは、ローカルとグローバルを結ぶ主体の解明が今後の重要な課題になるように見えました。

垂直方向の権力と水平方向の人間の移動と連帯という視座は第二セッションにも引き継がれ、東方正教会、ナショナリズム、国家建設のテーマを軸に議論が展開しました。ここでは、中東という地域における列強の介入の激しさも改めて確認しました。Alexov氏は、厳格な教会法の階層構造がナショナリズムの時代に列強の後押しを得ながら民族教会に分裂していく様を概観するものでした。教会法の話を知っていると、個人的には、ロシアのナショ

ナルな枠組みでのみ語られがちな17世紀のニコンの改革が東方正教の世界に与えた越境的な意味も今後考えていかなければならないのではないかとの印象を持ちました。黒木氏は、マンチェスター・シリア協会の人脈に着目して、旧オスマン空間における第一次大戦後の国家と連邦の構想を論じました。帝国が瓦解する中でも、ギリシア人、アルメニア人、アラブ人が異国の地で協力して、オスマン空間のつながりを維持しようとした点は、オスマン人としてのコスモポリタニズムの強さを示しているようにも見えました。Rubins氏の報告は、パレスチナ人という政治主体がソ連の梃入れで実体化したことを強調するもので、トランスナショナル・ヒストリーの観点からは確かに興味深いものでした。とはいえ、民族の構築（虚構）性を暴くよりも、イスラエルという国家の過酷な統治、そして反セム



SSEESの入り口にて

主義のセムからいつの間にかムスリムが欠落して、ユダヤ人に一本化してしまっていることにも留意すべきではないかという議論に至りました。

第三セッションでは、ロシアとウクライナの容易ならざる脱植民地化の困難とロシアの帝国性の持続を議論しました。青島氏は、ロシア・ウクライナ戦争という文脈の中で、帝国・ネイション・脱植民地化がどのような意味をもつようになったかを分析し、特にウクライナがヨーロッパ的シヴィック・ネイションの構築を目指すのに対し、ロシアは反西欧的な多民族ネイションであることを強調するようになったとして、その二つの対立するネイション観の形成のプロセスを論じました。Blacker氏はウクライナとは何かについての「西側」の理解が著しく欠落していたことを指摘し、今までの文化研究が帝国の中心に関心を集中させ、それに圧迫される辺境的なウクライナ語文化という単純な見方しかしない「植民地状況」にあったと論じます。これに対して氏は、ウクライナ文化にある、多言語・多文化的ハイブリッド性を繊細に掬い上げ、そこに現れる実験性や抵抗のサインを読み取ろうとしていました。Murawski氏の報告題名にある「プーチンの楽園」とは、モスクワの赤の広場の横に2017年に開園したザリャジエ公園のことです。それは、ハイテクで環境にやさしい装いをもちながら、ロシア中の植生と食を再現し、旧ソ連圏を含む労働者を公園の整備に動員し、市民の自由な行動を称揚しつつそれを監視するカメラを至るところに設置するなど、プーチンが再構成しモスクワ人に下賜した帝国のミニチュアであると氏は説きます。同様の公園は、ウクライナのマリウポリにも計画されているそうです。

今回のワークショップは、2023年2月に札幌で開催した生存戦略研究の全体集会に続く対面の研究会です。2025年7月にはICCEESがロンドンで開かれますので、そこでのパネルの組織などに向けて2024年もSSEESとの共同研究を発展させたいと考えています。[長縄・青島]

Panel 1: Long Twentieth Century

Chair: Alena Ledeneva

Jakub Beneš, “Land Wars and the History of Empires since 1918”

Norihiro Naganawa, “Rhizomes of Insurgents, Forests of Nation-States: Russia and the Middle East in the Aftermath of Empires”

Discussion moderator: Alena Ledeneva

Panel 2: Religion and Nation in the Post-Ottoman Space

Chair: Peter Zusi

Bojan Alexov, “End of Empires as Ecclesiological Crisis?”

Hidemitsu Kuroki, “Trust and Mistrust in Self-Determination: Proposals of Lebanese and Syrian Migrants to the Paris Peace Conference”

Maria Rubins, “What Is Palestine? Who are the Palestinians? A Long History of a Contested Concept”

Discussant: Norihiro Naganawa

Panel 3: Decolonization and Imperial Temptation in the War

Chair: Maria Rubins

Yoko Aoshima, “Empire, Nation and Decolonisation in the Context of the Russo-Ukrainian War”

Uilleam Blacker, “Ukraine’s Diverse Landscape of Literary Resistance and the Russo-Ukrainian War”
Michal Murawski, “re-Colonial Russia: Architecture, Landscape and Violence in Putin’s Paradise”
Discussant: Eric Gordy

スラブ・ユーラシア研究センター&メルボルン大学の ジョイントセミナー開催される

センターは、2024年1月12日（金）に北海道大学メルボルン大学ジョイントセミナー「Eurasian Migration. Past, Present and Future」を開催しました。本セミナーは、北海道大学とメルボルン大学が国際研究連携深化のために、新規研究テーマと異分野融合研究の可能性を探る合同コンファレンスの開催、博士課程学生の共同指導の更なる促進、そして新規研究連携を支援する合同研究ワークショップファンドを立ちあげ、その2023年度採択ワークショップとして催されたものです。

また、このジョイントセミナーは、大学共同利用機関法人人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクトのグローバル地域研究推進事業「東ユーラシア研究プロジェクト」（以下EES）における四拠点のひとつ（他に東北大学、国立民族学博物館、神戸大学）として、「文化衝突とウェルビーイング」、とりわけ「越境とジェンダー」を中心テーマとする研究事業との共催でもありました。

メルボルン大学側からは博士候補者を含む6名、北海道大学側（主にEES北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター拠点メンバー）からは7名が参加し、過去、現在、未来における「移動」を軸に活発な議論を行いました。ロシアによるウクライナ侵攻という今般の世界情勢を踏まえ、ロシア帝国・ソ連西部国境地域に関する歴史研究の再構築、戦後冷戦秩序における移民難民問題など、多岐に渡るテーマをもとに、熱心なやり取りが交わされました。さらに、今後の共同研究のための研究班の結成、来年度以降の研究発展計画の作成を話し合い、さらなる研究協力の拡大につながるとても有意義なワークショップとなりました。

セミナーに先立ち、メルボルン大学研究者らは本学附属図書館を訪問し、大型コレクションを見学し、附属図書館が世界に誇る大型コレクション、特にヴェルナツキー文庫、ボリス・スヴァーリンコレクション、ロシア亡命文学コレクション、ヘンリク・ゲルシンスキー旧蔵ポーランドコレクションなどに強い関心を寄せ、将来的な本学での長期在外研究についても相談を受けたほどでした。図書館ツアーにご協力いただいた附属図書館スタッフに感謝いたします。[井上]



参加者の集合写真

日本国際問題研究所共催シンポジウム 「戦間期国際秩序の形成とその変容：地域間比較と日本」の開催

センターは、2024年1月20日（土）13:30～18:50に、TKP ガーデンシティ PREMIUM 札幌大通にて、標記のシンポジウムを日本国際問題研究所と共催しました。これは同研究所で行われている、戦間期国際秩序の形成で日本が果たした役割に関する研究の一環として着想されたものです。戦間期の国際秩序の形成・変容・動揺・崩壊を、日本を焦点としながらさまざまな地域の観点から検討し、特にソ連・日ソ関係に重点を置くことがこの企画の特色でした。センターからは、藤本と宇山が企画に参加しました。

シンポジウムで報告者たちは、第一次世界大戦の戦後処理における敗戦国の封じ込めから包摂への移行、国際秩序を形成した国際連盟とワシントン体制が呼び起こした期待と不安、国際秩序と東アジア地域秩序の関係の複雑さ・曖昧さなどを論じました。国際秩序のアウトサイダーであったソ連については、日本に強い警戒感を抱き、北東アジア地域秩序へのアメリカの引き込みや日中対立の煽動、日ソ不可侵条約の締結などを試みたが上首尾ではなかったこと、対日・対独の東西二正面戦争の回避が大きな課題で、ノモンハン事件およびその停戦と、独ソ不可侵条約・ポーランド侵攻が連動していたことなどが指摘されました。セッションのコメンテーターや総合討論のディスカッサントからは、諸報告の論点を掘り下げたり拡張したりするコメントが出され、特に日本が国際秩序・地域秩序においてルール・メイカーだったのか、それともルール・テイカーやルール・ブレイカーだったのかについて、時期・地域や問題群による違いに留意しながらさまざまな角度から検討されました。

シンポジウムには対面とオンラインを合わせて130人以上の参加者があり、アンケートでは、歴史的な観点から現代につながる諸問題の根源に迫る議論が聞けてプログラムのすべてが期待以上だった、戦間期ソ連の側からの国際秩序についてはあまり考えたことがなかったのでもともと参考になった、など好評でした。[宇山]

プログラム：

第一セッション「第一次世界大戦後の国際秩序の形成と地域秩序」

モデレーター：細谷雄一（慶應義塾大学教授／日本国際問題研究所上席客員研究員）

スピーカー：藤山一樹（大阪大学講師）「第一次世界大戦後の国際秩序形成」

樋口真魚（成蹊大学准教授）「新秩序の形成と日本外交：日本はなぜルール・メイカーになれなかったのか」

赤川尚平（日本国際問題研究所研究員）「第一次世界大戦後のトルコ講和における日本外交」

藤本健太郎（SRC 非常勤研究員）「日ソ不可侵条約が結べない：1920年代ソ連の極東安全保障」

コメンテーター：ヤロスラフ・シュラトフ（早稲田大学教授）

前田亮介（北海道大学准教授）

第二セッション「戦間期国際秩序の動揺」

モデレーター：宇山智彦（SRC 教授）

- スピーカー：高柳峻秀（東京大学大学院博士後期課程）「戦間期東アジア国際秩序における日中関係：教科書問題を中心に」
河西陽平（中曽根康弘世界平和研究所研究助手）「ソ連の1930年代における対日情勢認識：諜報活動の観点から」
笠原孝太（日本大学助教）「乾盆子島事件がもたらした動揺とソ連の対日態度」
花田智之（防衛省防衛研究所主任研究官）「戦間期におけるソ連の極東戦略と国際秩序：安全保障の国際秩序化」
コメンテーター：麻田雅文（岩手大学准教授）、北村嘉恵（北海道大学准教授）

総合討論

- ディスカッサント：川島真（東京大学教授）
細谷雄一（慶應義塾大学教授／日本国際問題研究所上席客員研究員）

サハ経済に関する国際ワークショップの開催

センターが推進している北極域研究加速プロジェクト（ArCS II）社会文化課題では、1月16日に「ロシア北極域の変動：サハのケース」と題する国際ワークショップをセンターで開催しました。このセミナーでは、ヤクーツクから2人の研究者、パリから1人の研究者（元々はヤクーツクの研究者）を招いたほか、モスクワの地理学研究所所属で同志社大学に滞在中の研究者、ヤクーツクの北東連邦大学出身で東北大学に留学している院生も招きました。昨年11月からヤクーツクのナジェジダ・クラシリニコワさんがセンターに滞在していたので、以上の6人のロシアの研究者がこのワークショップで報告を行いました。モスクワからの研究者も、サハの人口に関する報告を行いました。日本側からは、田畑がサハ経済構造の変化、服部氏がサハのダイヤモンド産業に対する経済制裁の影響に関して報告を行いました。このように、報告8本すべてがサハ経済に関するものでした。

サハに特化するようなワークショップを開催したのは、我々が行っているプロジェクトにおいて、データの共有、共同の分析など、サハの研究者と深く連携してきたことが関係しています。さらに、ArCS IIの研究成果を『北極域経済の変動：ロシア連邦サハ共和国を事例として』と題する本にまとめる話が進行していることも関係しています。2020年度にArCS IIが開始されたときには、サハとヤマルに重点を置くことを計画していましたが、結果的にサハをより重視することになりました。コロナの感染やロシアのウクライナ侵攻という想定外の状況のなかで、現地の研究者との密接な研究協力なしには、我々が行おうとしていたような研究を進められないという事情がこの背景にあります。さらに、サハでは、石油・ガス生産が近年急増しており、資源開発の現地経済への影響を研究するという我々のテーマにとって、その影響を同時進行で分析できるというメリットもあります。ワークショップでは、サハの特定の地方自治体の経済状況に関する質問が出されるなど、濃密な議論が展開されました。

[田畑]



ワークショップ後の集合写真

シベリアとアラスカに関わるセミナーの開催

センターが推進している北極域研究加速プロジェクト（ArCS II）社会文化課題では、2月13日にTKP 東京駅カンファレンスセンターにおいて「シベリアとアラスカ：北極圏の好敵手同士の経済と社会」と題するセミナーを対面とオンラインのハイブリッドで開催しました。この企画は、本課題の5人のメンバーが、昨年8月末から9月初めにかけてアラスカのアンカレッジとノーススロープにおいて、石油・ガス産業などに関する現地調査を行ったことに端を発しています（センターニュース 170号参照）。2022年2月以降、ロシアでの調査ができなくなっていることから、本課題ではロシアと他の国の北極域の比較を行うことにも取り組んできました。

セミナーでは、まず森永貴子氏（立命館大学）が、ロシア領アラスカがアメリカに売却されるようになるまでの歴史的経緯について解説し、その後、原田大輔氏（JOGMEC）が石油・ガス、服部倫卓氏（SRC）が漁業、後藤正憲氏（農林水産政策研究所）が化学肥料について、現在のシベリアとアラスカ、あるいはロシアとアメリカの間の対抗関係について報告しました。シベリアとアラスカの地理・気象の共通性が歴史的なつながりや産業の背景にあり、両地域の強みとする産業の間で激しい対抗関係が生じていることが浮き彫りにされました。ロシアとアメリカが互いに経済制裁を科し合うような現在の状況において、この対抗関係がますます複雑な様相を帯びようになっていることも明らかにされました。このセミナーには対面で15名、オンラインで45名の参加があり、活発な質疑がなされました。[田畑]



森永氏による発表



原田氏による発表

2024 年度外国人招へい教員（外国人研究員）の決定

2024 年度の外国人招へい教員（外国人研究員）は、以下 6 名の方が決まりました（姓のアルファベット順）。北大での職名はボフダン・クオクシティス両氏が特任准教授、他は全員特任教授となります。採用者の所属や研究テーマ、フィールドの多様化が目立ちますが、ロシアによるウクライナ侵略戦争が長期化しスラブ・ユーラシア研究の見直しが迫られている現状を踏まえると、センターの研究の柱の一つとなった生存戦略研究、2 月に新たに発足したウクライナ及び隣接地域研究ユニット等と連携した新しい国際共同研究の可能性が開かれつつあると言えます。なお滞在期間については状況により変更の可能性があります。
[安達]

ベッキン, レナト・イリコヴィチ (Bekkin, Renat Irikovich)

本務機関・現職：ロシア科学アカデミー・アフリカ研究所上級研究員（ロシア）

研究テーマ：クリミア・タタールにとって歴史が再び問題となるとき：2014 年以降のクリミアで揺さぶられるアイデンティティと失われたその礎の探求

滞在期間：未定

担当教員：長縄

ボフダン, シャルヘイ (Bohdan, Siarhei)

本務機関・現職：ミンスク国際関係対話協議会上級研究員（ベラルーシ）

研究テーマ：義務なき関係：イスラム主義イランとソ連／ロシア

滞在期間：2024 年 6 月 1 日～ 10 月 31 日

担当教員：長縄

カツマン, ロマン (Katsman, Roman)

本務機関・現職：バル＝イラン大学ユダヤ文学部教授（イスラエル）

研究テーマ：ロシア語・ウクライナ語によるイスラエルへの帰還・移民の文学におけるメロドラマ的叙法（モダリティ）

滞在期間：2024 年 7 月 2 日～ 10 月 28 日

担当教員：安達

クオクシティス, ヴィタウタス (Kuokštis, Vytautas)

本務機関・現職：ヴィリニウス大学国際関係・政治学部准教授（リトアニア）

研究テーマ：リトアニアの成長というパズルの政治経済学

滞在期間：2024 年 12 月 1 日～ 2025 年 3 月 21 日

担当教員：仙石

ニコラエンコ, オレーナ (Nikolayenko, Olena)

本務機関・現職：フォーダム大学政治学部教授（米国）

研究テーマ：現代ベラルーシにおける労働動員
滞在期間：2024年7月1日～9月1日
担当教員：服部

ルヴィンスキー，ウラジミル（Rouvinski, Vladimir）
本務機関・現職：イセシ大学教授（コロンビア）
研究テーマ：バック・トゥ・ザ・フューチャー？ラテンアメリカにおけるロシアのシンボル
政治
滞在期間：2024年10月1日～2025年1月31日
担当教員：岩下

共同研究員

2024年度からセンター共同研究員になっていただく方々は以下の通りです（各カテゴリーの中では五十音順）。2023年度から2年任期の共同研究員については、センターニュース第168号をご参照ください。[編集部]

共同研究員（一般）

任期：2024年4月1日～2026年3月31日（2年間）

天野尚樹（山形大）、荒井幸康、伊藤愉（明治大）、井上岳彦（大阪教育大）、井上まどか（清泉女子大）、ヴァレリー・グレチュコ（東京大）、小泉悠（東京大）、越野剛（慶應義塾大）、後藤正憲（農林水産政策研究所）、古宮路子（東京外国語大）、斎藤慶子（早稲田大）、シュラトフ・ヤロスラブ（早稲田大）、東島雅昌（東京大）、藤森信吉、堀江典生（富山大）、前田しほ（島根大）、松井康浩（九州大）、松本かおり（神戸国際大）、宮崎千穂（静岡文化芸術大）、ミルラン・ベクトウルスノフ（日本学術振興会）、山脇大（野村アセットマネジメント株式会社）

任期：2024年4月1日～2025年3月31日（1年間）

井上暁子（熊本大）、大茂矢由佳（埼玉大）、菊間史織（尚美学園大）、熊野直樹（九州大）、桑原尚子（岩手県立大）、小柳悠志（中日新聞社）、佐藤ひとみ（東京外国語大）、イーホル・ダツェンコ（名古屋大）、中井杏奈（東京外国語大）、中澤佳陽子（東京理科大）、日臺健雄（和光大）、松澤祐介（西武文理大）、松本祐生子（早稲田大）

生存戦略共同研究員

任期：2024年4月1日～2026年3月31日（2年間）

秋草俊一郎（日本大）、泉川泰博（青山学院大）、遠藤乾（東京大）、大石侑香（神戸大）、岡本亮輔（北大メディア・コミュニケーション研究院）、後藤春美（東京大）、小松久恵（追手門学院大）、酒井啓子（千葉大）、佐々木卓也（立教大）、佐藤健太郎（北大文学研究院）、未近浩太（立命館大）、菅井健太（北大文学研究院）、寺尾智史（一橋大）、土井翔平（北大公

共政策大学院)、當山奈那(琉球大)、中澤達哉(早稲田大)、馬場香織(北大法学研究院)、原田大輔(エネルギー・金属鉱物資源機構)、藤波伸嘉(津田塾大)、宮脇昇(立命館大)

境界研究共同研究員

任期：2024年4月1日～2026年3月31日(2年間)

池ノ上真一(北海商科大)、井竿富雄(山口県立大)、上原良子(フェリス女学院大)、エドワード・ボイル(国際日本文化研究センター)、川久保文紀(中央学院大)、黒岩幸子(京都外国語大)、鈴木一人(東京大)、田中輝美(島根県立大)、田村慶子(北九州市立大)、花松泰倫(九州国際大)、平井一臣、福原裕二(島根県立大)、古川浩司(中京大)、水谷裕佳(上智大)、三村光弘(新潟県立大)、山上博信(豊田工専)、山崎孝史(大阪市立大)、屋良朝博(衆議院議員)

任期：2024年4月1日～2025年3月31日(1年間)

田村将人(国立アイヌ民族博物館)

専任・助教・非常勤研究員セミナー

ニュース前号以降、専任研究員セミナー等が以下のように開催されました。例年、年度末に集中しがちですが、2023年度もこの時期に充実したセミナーが多数開催されました。

専任研究員セミナー

2023年12月20日 青島陽子

報告:「帝国」と「脱植民地化」の現代的文脈:ウクライナとロシアの国家アイデンティティの衝突

コメンテータ:宇山智彦(SRC)

このペーパーは、広島平和研究所のプロジェクト研究およびUCL SSEESで報告した内容を基にしたもので、ロシア・ウクライナ戦争と歴史学をテーマとする論文集に掲載予定とのことです。2023年度にイギリス・アメリカのスラブ東欧関係の主要学会の年次大会のテーマともなった「脱植民地化」をキーワードに、ソ連崩壊後のウクライナとロシアそれぞれの国家アイデンティティやネーション観の特徴と変化を丹念に追跡することで、両者の衝突の諸相を明らかにしています。コメンテータからは、歴史認識やネーション観の安全保障化についての分析が高く評価される一方、「帝国」「脱植民地化」といったキーワードの定義や従来の研究との関係、ソ連崩壊期以降の現代史記述、ロシアとウクライナの状態アイデンティティの構築における非対称性や、ウクライナ・ナショナリズムのあり方の変化、ロシアの帝國的な国家観に「シヴィック・ナショナリズム」という用語を適用することの是非等についてコメントがありました。そのほかフロアからは、両国の言語・民族・宗教・ナショナリズムに関するものから、ナショナル・ヒストリーとグローバル・ヒストリーの関係に至るまで幅広い議論が提起されました。「新しい歴史像」の再構築に目を向ける報告者の真摯な問題意識と熱意が会場に共有され、真正面から受け止められる会となりました。[安達]

2024年1月24日 諫早庸一

報告：14世紀の危機の語り方：ヨーロッパ到来以前の黒死病

コメンテータ：小澤実（立教大学）

このペーパーは、報告者自身が昨秋組織した国立大学附置研究所・センター会議第3部会シンポジウムでの報告を基にしたもので、セミナー後に改稿を経て『思想』2024年4月号に掲載されました。現在ユーラシア史の研究で議論の盛んなペスト（黒死病）と政治的変化並びに気候変動とを連関させることで、これまで西洋史研究の概念とされてきた「14世紀の危機」をユーラシアの東西をつなぐ中央ユーラシアという歴史空間から語り直そうとするものです。モンゴルの平和に基づく「13世紀世界システム」の崩壊は従来ペストが原因であると考えられてきましたが、近年のペストに関するDNA研究を踏まえて、崩壊の原因はモンゴル帝国の統治システムの変化に求められます。これは「危機」というよりも、外在的な環境と人間の移動という要件に従ったより適切なシステムへの移行と見ることができるのです。コメンテータからは、射程の広さと新たな歴史記述の方法に挑む意欲、最新の文理協働研究の紹介としての意義が高く評価される一方、学説的に固まっていない日々アップデートされているデータに歴史記述全体が依拠していることについて指摘がありました。また、モンゴル帝国のネットワークをつなぐものとしての都市、中間団体、記憶装置、河川やオアシスについて、そして「14世紀の危機」に基づく歴史記述の射程について質問がありました。フロアでは、モンゴル帝国による世界システムのコンセプトや実態、帝国が分裂するプロセスとそこでの中心と周縁の関係、ペストと気候変動をどのようにモンゴル帝国の歴史記述に組み込むかについて等、「諫早史学」への熱い期待が感じられる議論が続きました。[安達]

2024年2月13日 デビッド・ウルフ

報告：1. The Fate of the Russian Emigres in China: Exclusion, Agency, Divided Redemption

2. Stalin and Taiwan, 1943-53

コメンテータ：岩下明裕（SRC）

今回は二つのペーパーが提出され、セミナーで報告された1は著書『ハルビン駅へ』（原著1999、日本語訳2014）の続巻として構想されている著作の一部になる予定のものです。1917年のロシア革命とそれに続く内戦、10年後の中露国境紛争（1929）、日本の満洲侵攻（1931-32）、中東鉄道の共同管理からのソ連の撤退（1935）、そしてソ連の満洲侵攻・占領（1945-46）と1949年の中国共産党の勝利を背景に、極東へのロシア人移民とそこからのさらなる移住が進みましたが、反共産主義と反ユダヤ主義が結びつき、排除されたロシア人は放浪を余儀なくされました。主題となるのはハルビンから上海に移動したロシア人で、そこからマニラの南方トゥババオ島の難民キャンプに移住、やがて当時アジア移民の受け入れに消極的だったアメリカとオーストラリアに入国するまでが描かれています。三人の人物に焦点が当たり、過酷な環境下でハルビン時代の工科大学やピオネールの組織や技術、キリスト教のネットワークが生かされたことが論じられています。コメンテータからは、人物にフォーカスしながら人々と国家の交差を浮かび上がらせる手法や、杉原千畝研究の成果も生かした移民の歴史への取り組みが高く評価されるとともに、フィッツパトリックの先行研究との関係、オーストラリアのユダヤ人移民受け入れ政策におけるロシア系ユダヤ人の位置づけ、上海とハルビンでのロシア人移民の受け入れ状況の違い、アメリカとオーストラリ

アでのロシア人移民のコミュニティの存続等についてコメントがありました。出席者からは、ロシア人移民（ハルビン出身者たちの特徴、ウクライナ人移民との関係、上海に残った移民たちのその後）、一連の移住にロシア正教の果たした役割、グローバル・ヒストリーへの貢献等をめぐって興味深い論点が提起され、ペーパーへの高い関心が示されました。[安達]

2024年3月18日 宇山智彦

報告：「ポストソヴィエト」と「グローバルサウス」の狭間の中央アジア：地理的概念の政治的機能

コメンテータ：大庭三枝（神奈川大学）

今回のペーパーは、日本国際政治学会 2023 年度研究大会部会「グローバル・サウス、その意味、共通点、多様性」での報告の際に提出された原稿の加筆版で、「グローバル・サウス」という概念と中央アジア諸国との関係について包括的な議論を行うことを試みるものでした。ここでは中央アジア地域の位置付けに関して「グローバル・サウス」や「ポストコロニアル」よりは「ポストソヴィエト」あるいは「ユーラシア」という地域概念が用いられることが多いこと、「グローバル・サウス」という表現は結局のところ自国（特に大国）の利益の追求のために用いられていることなどを論じた上で、その中で中央アジア諸国は「グローバル」を強調しながら大国（特にロシア）の意図を無効化し周辺の地域を結びつける連結点となることを追求しているという議論が提起されています。コメンテータの大庭氏は最近の「グローバル・サウス」論の整理を行った上で、「ポストコロニアル論」と中央アジアとの接合性、「グローバル・サウス」論に見られる大国主義と中小国のプラグマティズムなどいくつかの論点について、東南アジア諸国との比較も踏まえたコメントがなされました。フロアからは「大国主義」の意味、旧ソ連諸国へのポストコロニアル論や「グローバル・サウス」論の適用の是非、ポスト社会主義とポストソヴィエトの関係、中東欧諸国との相違と共通性、国家中心の視点で「グローバル・サウス」論を語ることの限界など、多様な論点からの議論が提起されました。[仙石]

2024年3月22日 安達大輔

報告：“Introduction” to *Melodrama and Melodramatic Imagination in the 20th and the 21st Century Russia: New Perspectives*

コメンテータ：マリーナ・バーリナ（イリノイ・ウェズリアン大学）

今このペーパーは、2022 年度に報告者が SRC で主催した夏期シンポジウムの成果に基づいてバーリナ教授と編集集中の、ロシア・ソ連のメロドラマ文化についての英語論集（タイトルは仮題）の序文のたたき台として提出されました。ピーター・ブルックスの『メロドラマ的想像力』（1976）発表以降の研究の発展と近年の見直しが概観された後、ハイブリッド性を軸にメロドラマ研究史の再構築を行うことが提案されます。ロシア・ソ連の文化史記述はこのハイブリッド性を切り捨てることでその一体性や純粋性を保ってきましたが、アジア（インド・日本・韓国）で進行している従来の西洋中心主義的なメロドラマ研究の見直し同様、ロシア・ソ連文化へメロドラマ研究を導入することは、ロシア文化と西洋文化それぞれの暗黙のヒエラルヒーや価値観を明るみに出すこととなります。メディア論や感情・情動研究等の現代的な方法論を取り入れながら歴史と現代のつながりのより多様な姿を描き出すこ

とで、この論集はロシア・ソ連研究、メロドラマ研究、そして現代の文化・政治状況の分析への大きな貢献となることが期待されます。コメンテータからは、本論の背景となる理論的・歴史的知識が高く評価されるとともに、ハイブリッド性はメロドラマの本質か歴史的事象かといった議論、メロドラマ的想像力に関する一連の用語の整理、文化と政治の関係についてコメントがありました。フロアからは、序文として備えておくべき構成や内容、ロシアにおけるメロドラマについての異質性のイメージ、比較研究の必要、エリート文化あるいは陰謀論との関係、メロドラマ研究の脱植民地化やオクシデンタリズムについて等、多岐にわたり重要な論点が提起され、序文執筆に大いに役立つ貴重な機会となりました。[安達]

助教セミナー

2024年3月18日 井上岳彦

報告：殺生に励む仏教徒：アストラハン県ハタリス駆除事業

コメンテータ：地田徹朗（名古屋外国語大学）

このペーパーは、昨秋のロシア・東欧学会の環境問題についての共通論題報告の一部を発展させて、1894年からのハタリス（リス科）駆除にカルムイク人が参加した理由や社会的な背景を検証するものです。多くの住民が動員されたこの駆除事業にカルムイク人などの牧畜民が関与していたことは先行研究では議論されてきませんでした。当時牧畜民・農民の関係は18世紀の対立関係から相互依存へと移行していましたが、移動の制限によって牧畜は弱体化し、それを補完するはずの漁撈にも19世紀半ばに制限が加わったため、貧困層は出稼ぎ労働者へとなっていました。遊牧民の生活を一変させ市場経済に組み込むことになった1892年の「改革」によって経済的混乱が加速したことで、カルムイク人はハタリス捕獲による現金収入に熱狂し、ロシア人の農村経営は穀物栽培を保護するためにハタリス捕獲に依存する状況が現出しました。「改革」によって間接統治が終わり、従来の支配層の特権とともに僧団の権威も失われていくなか、不殺生に価値を見出してきたはずの仏教徒が駆除事業に飲み込まれる過程を、カルムイク人から仏教的価値観そのものを奪う破壊的措置だったと結論づけています。コメンテータからは、まず（不）殺生をめぐる当地での宗教観について、動物の境界をめぐる言説や宮本万里氏の先行研究等を参照しながらより多くの言及がなされるよう要望がありました。さらに農業と牧畜の非対称性とエコシステムの関係、公衆衛生（ペスト対策）との関連性等に目を配ることで近代化論に終始することなく論を展開する方向が示されました。フロアからは、不殺生の慣習の歴史の変遷、「改革」の制度や組織を尋ねる質問のほか、直接統治による抑圧という図式におさらずカルムイク人が自分たちの利益に基づいて主体的に駆除に参加した可能性や、農耕と牧畜の非対称な力関係を植民ロシア人とカルムイク人の関係からとらえ直す視点が提起されました。移動と生態系の方に着目した非常に興味深い研究として、さらなる発展を期待させる会となりました。[安達]

2024年3月21日 村上智見

報告：中央アジア初期鉄器時代の織物文化：ウズベキスタンのコク・テパ遺跡出土土器布圧痕の調査から

コメンテータ：宇野隆夫（帝塚山大学、国際日本文化研究センター）

このペーパーは発掘調査報告書への掲載依頼に基づいて執筆されたものです。古くから東西南北交易路の要衝として栄えた中央アジアのソグディアナは著名な織物産地として知られ

ていますが、各時代を通して織物が出土することは珍しく、7世紀前の織物文化については実物資料の不足から詳しいことは明らかになっていません。報告者はこれまでのところ唯一の手掛かりとなっている初期鉄器時代の土器に残された布圧痕を詳細に調査することで、ソグディアナが著名な織物産地として発展する中世以前の当該地域の織物文化を明らかにしようと試みます。本調査により様々な種類の技法が当該地域においてはじめて確認され、不明な点が多かった初期鉄器時代の織物文化の一端が明らかになりました。中には非常に高品質な織物も散見され、初期鉄器時代にすでに高度な製糸・製織技術が存在していたことを示唆するものであると結論づけられています。コメンテータからは、学際的な場でのわかりやすさの重要性についてのコメントとともに、専門用語の丁寧な解説がなされました。また本稿で論じられているコク・テパ遺跡出土土器に関連して、出土土器の系譜、遺跡と関わる民族の推定方法、織物工房、中国製絹織物が伝わっていた可能性等についてコメントがありました。フロアからは、分析における顕微鏡の使用や圧痕のタイプ、織物の生産地を特定する方法等についての技術的な質問のほか、当該時代の織物文化や織物の取引の状況について、また当時の住民とソグド人との連続性、オアシスと草原のイラン系住民の関係、織物から見えるもの、身体技法と織物の関係、中世という用語の使用法等について、興味深い質問やコメントが多数寄せられ、センターのセミナーではなかなか出会うことの少ないはるか遠い過去をめぐって議論が盛り上がりました。[安達]

非常勤研究員セミナー

2024年1月25日 藤本健太郎

報告：北滿鉄道讓渡協定(1935)と1930年代前半におけるソ連の東アジア外交戦術

コメンテータ：醍醐龍馬(小樽商科大学)

このペーパーは報告者が着任時に構想していたもので、雑誌『東アジア近代史』に掲載予定とのことです。主にロシア語の文書館資料と刊行資料集、及びアメリカの外交文書集を用いながら、1930年代前半のソ連の東アジア戦略を、1935年に満洲国との間で締結された北滿鉄道讓渡協定を中心に検討しています。先行研究では十分に考慮されてこなかった、戦略に基づいて実際の政策を組み立てた「外交戦術」、常に大きな存在として意識されていたアメリカファクター、1920年代との連続性／非連続性等に焦点が当てられ、ソ連の東アジア外交戦略が1920年代から1935年まで一貫して日ソ米中の4カ国で東アジアのバランスを取ってその中でソ連の安全保障を得ることを目指していたこと、そしてその4つのファクターを位置付けて操作する具体的な外交戦術が明らかにされます。コメンテータからは、イデオロギーだけでなくパワーポリティクスに注目する近年の研究に適合している点等が評価される一方、実際の分析ではソ連の対日外交がメインになっている点、ワシントン体制などアメリカファクターをより深堀りする必要、イギリスとの関係、鉄道売却をめぐる諸状況(ロシア帝国史との連続性、この時期の日ソ関係の特殊性、内政を含むソ連政府内の交渉過程)等についてコメントがありました。フロアと報告者の間では、戦略／戦術の区別をはじめとする分析概念、宥和政策の歴史的評価、ヨーロッパと極東の関係(コミンテルン、ナチス、中国共産党といったアクター)、日本側外交における担当者の顔の見えにくさ等、このテーマに対するセンター内外の注目度の高さを裏付ける白熱した議論が行われました。[安達]

2024年2月29日 ミルラン・ベクトゥルスノフ

報告：The Soviet Attempts at Lineage Stratification: The Local Elections and Anti-Manap Campaigns in Soviet Kyrgyzstan in the 1920s

コメンテータ：秋山徹（北海道教育大学）

このペーパーは、中央アジア遊牧社会におけるソ連の階級政策が新しい社会・経済的文脈の中で氏族間の力関係の再編成を促したと論じる近年の研究を踏まえながら、この政策が氏族社会においてもともと存在していた緊張関係に立脚していたことを強調しています。1920年代クルグズの地方選挙では遊牧社会における伝統的な支配層であったマナブに対抗するようにブカラ（従属的な地位に置かれた集団）を支援すると同時に、影響力のある氏族の首長を追放することで、ソヴィエト政権はクルグズの地方を直接支配下に置こうとしました。これは一種の氏族の階級化政策であったと結論づけられます。コメンテータからは、先行研究が対象としてきたマナブの流刑に加え選挙政策をセットで考察したことで、似た政策である後年の集団化・脱クラーク化と比べて独自の文脈を明らかにした点や、支配者が押しつける枠組みを現地民が読み替えたり利用したりするアプロプリエーションの分析について高い評価がなされました。同時に、こうした分析の独創性について検証を深める必要や、ネーション形成との関連、クルグズ遊牧社会における氏族の集団・主体・階層としての理解、クルグズ語をはじめとする資料のより精緻な読解についてコメントがなされ、欧米のソ連史研究や日本の中央ユーラシア史研究の潮流も踏まえた力強いエールの言葉が報告者に送られました。フロアからは、マナブとブカラそれぞれの主体性や相互の依存性について、中央との交渉の渦中にあった、記述される側の声や姿を拾うことを求める声が多く上がりました。そのほかソ連中央の政策と現地当局の政策の異同、氏族というカテゴリーの構築性、選挙における女性の重要性等についてコメントがあり、博士論文提出後に新しい展開を見せている報告者の研究に対する期待の熱量がうかがえました。[安達]

研究会活動

センターニュース 170号以降、センターが主催・共催した諸研究会活動は以下の通りです（国際シンポジウムを除く）。[編集部]

12月5日 北海道スラブ研究会 栗原成郎（東京大学・名誉教授）「十九世紀セルビアの作家ラーザ・ラザレヴィッチとスラヴ学の碩学ヤギッチ教授」

12月11日 SSEES-SRC Workshop (London) “Ends of Empires: Crisis and Resilience in the Long Twentieth Century” Panel 1: Long Twentieth Century; Jakub Beneš (SSEES) “Land Wars and the History of Empires since 1918”; Norihiro Naganawa (SRC) “Rhizomes of Insurgents, Forests of Nation-States: Russia and the Middle East in the Aftermath of Empires”; Panel 2: Religion and Nation in the Post-Ottoman Space; Bojan Alexov (SSEES) “End of Empires as Ecclesiological Crisis?”; Hidemitsu Kuroki (SRC / ILCAA) “Trust and Mistrust in Self-Determination: Proposals of Lebanese and Syrian Migrants to the Paris Peace Conference”; Panel 3: Decolonization and Imperial Tempta-

tion in the War; Yoko Aoshima (SRC) “Empire, Nation and Decolonisation in the Context of the Russo-Ukrainian War”; Uilleam Blacker (SSEES) “Ukraine’s Diverse Landscape of Literary Resistance and the Russo-Ukrainian War”; Michal Murawski (SSEES) “re-Colonial Russia: Architecture, Landscape and Violence in Putin’s Paradise”

12月11日 シンポジウム関連セミナー（東京） Alexander Kondakov (University College Dublin, Ireland) “From Panopticon to Memeticon: How Neo-Disciplinary Power Relations Work”

12月11日 シンポジウム関連セミナー（東京） Paula A. Michaels (Monash University, Australia) “The American-Soviet Medical Society and the Soviet “Fountain of Youth,” 1943–53”

12月11日 SRC Seminar “Манипуляция исторической памятью в современной России” Борис Ланин (Профессор Университета имени Адама Мицкевича, Познань) “Кто контролирует прошлое... Культурная модель постсоветского человека и современная образовательная стратегия в России”; Марк Липовецкий (Профессор Колумбийского университета) “Больше, чем ностальгия: Репрезентация позднего социализма в сериалах 2010-х-2020-х годов”

12月13日 SRC Seminar Lara Ryazanova-Clarke (University of Edinburgh) “Londongrad Before the War: Discourses of Cultural Identities of Russianspeaking Migrants in the UK”

12月14日 生存戦略研究シンポジウム 「『冬』に立ち向かうロシアと北海道のサッカー」服部倫卓 (SRC) 「ロシア・サッカーの蹉跌: 秋春制失敗とその他の苦悶」、宇都宮徹彦 (写真家・ノンフィクションライター) 「なぜ今、Jリーグ秋春制が議論されているのか?: 歴史的な視点とグローバルな観点から考察する日本サッカーのシーズン移行」、矢野哲也 (BTOPO 北海道代表取締役社長) 「北海道サッカークラブの挑戦: 秋春制とその他の課題」

12月15日 公開講演会 服部倫卓 (SRC) 「ウクライナ侵攻はロシア極東・シベリアをどう変えるか」

12月22日 中村・鈴川基金奨励研究員報告会 村田優樹 (ウィーン大学東欧史研究所博士課程/東京大学大学院人文社会系研究科博士課程) 「革命期ウクライナにおける民族化 (Nationalization), 1905–1923 年: ウクライナ民族およびロシア民族概念の制度的・社会的変容」

12月22日 Lecture Series (大阪) Mark Lipovetsky (Columbia University / SRC) “Affective Historicism in the Pre-War Russian Film”

12月25日 北海道スラブ研究会 伊藤愉 (明治大学) 「ロシア人演劇人グリゴリー・ガウズネルの日本紀行: グリゴリー・ガウズネル『見知らぬ日本』(共和国、2023年)を素材に」

12月27日 Lecture Series (東京) Mark Lipovetsky (Columbia University / SRC) “Trickster in Soviet Culture: A Cynical Challenge”

1月11日 SRC セミナー 封安全（黒竜江省社会科学院ロシア研究所）「双循環という新たな発展構図の下での中ロ経済協力の再構築」

1月12日 Hokkaido-Melbourne University Joint Seminar “Eurasian Migration: Past, Present and Future” Mark Edele, Julie Fedor, Oleg Beyda, Josh Strong, Aleksandra Riabichenko, George Fforde (University of Melbourne); David Wolff, Yoko Aoshima, Hyunjoo Naomi Chi, Takehiko Inoue, Norio Horie (Hokkaido University)

1月16日 Arctic Research Workshop “Changing Russian Arctic: The Case of Sakha” Turyara Gavriilyeva (North-Eastern Federal University) “Territorial Inequality, Poverty and Social Policy Effectiveness in the Sakha Republic (Yakutia)”; Nadezhda Krasilnikova (Arctic Research Centre of Sakha Republic (Yakutia) / SRC) “Economic and Environmental Dynamics of the Arctic Regions of Russia during Crises”; Natalia Yakovleva (KEDGE Business School, Paris) “Local Communities and Extractive Industries: Governance of Socio-environmental Impacts and Collective Action”; Shinichiro Tabata (SRC) “A Note on the Structural Changes in the Sakha Economy”; Michitaka Hattori (SRC) “Possible Impacts of Western Sanctions on Sakha Diamond Industry”; Tamara Litvinenko (Institute of Geography, RAS / Doshisha University) “Population Dynamics and Its Factors: Ethnicity and Regional Characteristics in Sakha (Yakutia)”; Nikita Bochkarev (Yakut Scientific Centre, SB RAS) “Socio-economic Vulnerability of the Yakutian Arctic”; Varvara Parilova (Tohoku University) “Climate Change Risk, Resilience, and Adaptation in the Sakha Republic: A Literature Review”

1月20日 日本国際問題研究所共催シンポジウム 「戦間期国際秩序の形成とその変容：地域間比較と日本」 第1セッション「第一次世界大戦後の国際秩序の形成と地域秩序」藤山一樹（大阪大学）「第一次世界大戦後の国際秩序形成」、樋口真魚（成蹊大学）「新秩序の形成と日本外交：日本はなぜルール・メイカーになれなかったのか」、赤川尚平（日本国際問題研究所）「第一次世界大戦後のトルコ講和における日本外交」、藤本健太郎（SRC）「日ソ不可侵条約が結べない：1920年代ソ連の極東安全保障」；第2セッション「戦間期国際秩序の動揺」高柳峻秀（東京大学大学院博士後期課程）「戦間期東アジア国際秩序における日中関係：教科書問題を中心に」、河西陽平（中曽根康弘世界平和研究所研究）「ソ連の1930年代における対日情勢認識：諜報活動の観点から」、笠原孝太（日本大学）「乾岔子島事件がもたらした動揺とソ連の対日態度」、花田智之（防衛省防衛研究所）「戦間期におけるソ連の極東戦略と国際秩序：安全保障の国際秩序化」

1月20日 シンポジウム（東京） 「戦争、国家、失われた故郷 北方領土×硫黄島」 岩下明裕（SRC / NPO 法人国境地域研究センター）「国境島嶼史・北方領土史について」、石原俊（明治学院大学 / 国際平和研究所 / 全国硫黄島島民3世の会顧問）「硫黄列島史・小笠原諸島史について」

1月21日 科研研究会（東京） 「大国主義の現代史」 小森宏美（早稲田大）「小国研究者から見た大国政治の系譜」、江藤名保子（学習院大学）「中国政治に見る大国政治の諸要素」

1月22日 SRC Seminar Nikolaj Antropov (Independent Scholar) “Восточнославянские рефлексы *telt* в свете этимологических решений для континуантов *selg-*”

1月23日 北海道中央ユーラシア研究会第146回例会 Charlotte Marchina (Inalco University, Paris / Tohoku University) “The role of animal individuality and diversity in the herds of Mongolian nomadic pastoralists”

1月27日 日本ロシア文学会 若手企画賞受賞ワークショップ 「〈暴力〉から問う：19-20世紀ロシア文化における暴力表象の横断的検討」 プログラム1「ロシア帝国と暴力なるもの」上村正之(北海道大学大学院博士後期課程)「叙事詩的であること、暴力的であること：ゴッリ『タラス・ブーリバ』の受容史をめぐる」、深瀧雄太(京都大学大学院博士後期課程)「レスコフにおける暴力の諸相」、大崎果歩(東京大学大学院博士後期課程)「レフ・トルストイにおける暴力とキリスト教」；プログラム2「『戦争と革命の世紀』再考」田村太(京都大学大学院博士後期課程)「世紀転換期の「暴力論」とサヴィンコフ／ロープシン」、松元晶(北海道大学大学院博士後期課程)「戦う「周縁」：中央アジア映画に見る戦いの表象」、大月功雄(立命館大学大学院博士後期課程)「ロシア映画理論と戦争映画：今村太平の記録主義リアリズムをめぐる」

2月2日 講演シリーズ「危機を生きるウクライナと世界」第1回 國谷光司(ウクライナ研究会)「この足で歩いた戦時下のウクライナ」

2月7日 生存戦略研究全体集会 「脱植民地化を考える」「東アジア・東南アジア」福原裕二(島根県立大学)「メタフィクション国家・北朝鮮：脱植民地化の限界」、野入直美(琉球大学)、「沖縄の軍事化と“脱軍事化”：アメリカンを中心に」鈴木絢女(同志社大学)「東南アジアの『脱』植民地化：政治経済の粘性と中立主義外交」；「南アジア・中東」竹中千春(立教大学)「インド・ナショナリズムの軌跡：ポストコロニアル、ポスト社会主義、グローバル・サウス」、酒井啓子(千葉大学)「中東地域研究から国際政治を見る：植民地支配と冷戦の遺恨」、細田和江(東京外国語大学)「ポスト・シオニズム文化としてのイスラエル文学」；「スラヴ・ユーラシア」樋渡雅人(北海道大学)「地域性と経済開発：ウズベキスタン住民の生存戦略」、赤尾光春(国立民族学博物館)「脱植民地化の身振りとしての笑い：現代ウクライナの風刺文化と対ロシア戦争以降の変容」、大石侑香(神戸大学)「国家の統治とハンティ」

2月8日 Plenary Meeting of the Research Unit for Ukraine and Neighboring Areas “Russia’s War against Ukraine and the Crisis in Eurasia: Challenges for the Humanities” Two Lectures on Ukraine: Mykola Yuri Riabchuk (Institute of Political and Ethnic Studies, Academy of Sciences of Ukraine, Ukraine / SRC) “Mapping a “Nowhere Nation”: Imperial Knowledge and Challenges of Decolonization”; Hiroaki Kuromiya (Indiana University) “The History of Ukraine in the Light of Russia’s War against Ukraine”; Roundtable: Humanities Before Humanitarian Crisis: Hiroaki Kuromiya (Indiana University) “Rising to the Occasion and Telling the Truth in Russia’s War against Ukraine”; Alexander Iskandaryan (Caucasus Institute, Yerevan, Armenia) “Nagorno-Karabakh: Ethnic Cleansing

as a Means to Achieve Territorial Integrity”; Aiko Nishikida (Keio University) “Denouncing Human Rights Violations in Israel-Hamas War”

2月8日 SRC Seminar Mirjana Mirić and Svetlana Ćirković (Institute for Balkan Studies SASA) “Gurbet Romani in contact: corpus data from Serbia”

2月13日 北極域研究セミナー（東京） 「シベリアとアラスカ：北極圏の好敵手同士の経済と社会」 森永貴子（立命館大学）「ロシア領アメリカとしてのアラスカとその売却」、原田大輔（エネルギー・金属鉱物資源機構（JOGMEC））「北極圏における石油ガス開発：ロシア及びアラスカの現状と両地域の比較分析」、服部倫卓（SRC）「北太平洋でしのぎを削るロシアとアラスカの漁業」、後藤正憲（農林水産政策研究所）「政治と経済の接点に立つ化学肥料産業：ロシアとアラスカを題材として」

2月14日 SRC (UBRJ / EES) Seminar Emmanuel Brunet-Jailly (University of Victoria, Borders in Globalization Coordinator) “Quantifying Borders: Border dyads and OSCE disputes”

2月18日 科研研究会（東京） 「政党政治の変動と社会政策の変容の連関：新興民主主義国の比較」 出岡直也（慶應義塾大学）「経済悪化とポピュリズムに関する試論：アルゼンチン2023年大統領選挙を考える」、磯崎典世（学習院大学）「韓国の政党政治と政治的分極化の浸透」、仙石学（SRC）「2023年10月ポーランド議会選挙の総括：2015年以降の経緯を踏まえて」

2月19日 客員研究員セミナー 松井康浩（九州大学／SRC）「冷戦変容下のソ連異論派と西側支援者の協働：CSCE 人権レジーム形成へのインパクト」

2月21日 講演シリーズ「危機を生きるウクライナと世界」第2回 「侵攻2年を経て変容するロシア・ウクライナ」 大串敦（慶應義塾大学）「戦時体制の成立：ウクライナとロシア」、服部倫卓（SRC）「経済から見たロシア・ウクライナの継戦能力」

2月24・25日 シンポジウム（横浜） 「ウクライナ文化の挑戦：激動の時代を越えて」 第1セッション「日本からウクライナへの視線／ウクライナから日本への視線」加藤直樹（フリーランス）「日本の左翼・リベラルの「ウクライナ否定」を考える：ウクライナ左翼グループ支援の経験から」、熊野谷葉子（慶應義塾大学）「ウクライナについて学ぶ：慶應義塾大学での試み」；第2セッション「ウクライナ文化の源流を辿る」原真咲（東京外国語大学）「ザスラーウシケイイ公の世界修復論」、大野斉子（宇都宮大学）「18世紀から19世紀前半におけるウクライナのイメージ形成と歴史観」、イーホル・ダツェンコ（名古屋大学）「言語禁止の状況におけるウクライナ語の活力」；第3セッション「映画と音楽に見るウクライナ精神の系譜」梶山祐治（筑波大学）「知られざるウクライナ映画：1960年代の詩的映画の興隆を中心に」、オリガ・ホメンコ（オックスフォード大学）「音楽で語るウクライナ史、政治、国民性；昔と今」；特別セッション Amelia Glaser (University of California, San Diego) “Ukrainian

Poetry on Social Media(?)”; Mykola Riabchuk (Institute of Political and Ethnic Studies, Academy of Sciences of Ukraine, Ukraine / SRC) “Ukraine: Unmuted: The Toxic Spell of “Imperial Knowledge” and Challenges of Decolonization”; 第4セッション「侵略に抗して：戦時下における文化実践の展開」赤尾光春（国立民族学博物館）「ロシア・ウクライナ戦争と笑い：ポリティカル・ジョークからエスニック・ジョークへ」、鴻野わか菜（早稲田大学）「ウクライナの現代美術」、原田義也（明治大学）「戦争を生き抜くための言葉：2022年2月24日以降に書かれた詩をめぐって」；第5セッション「ウクライナ・アイデンティティの変貌」池澤匠（東京大）「ロシアによるウクライナ侵攻の言語的背景」、平野高志（ウクルインフォルム）「ウクライナ人とは誰か」

2月26日 スラブ・ユーラシア研究センター公募研究共同研究班セミナー 川久保文紀（中央学院大学）「地政治から読み解くテイクポリティクス」

2月27日 SRC Seminar Xu Qinhu (Renmin University of China) “The Energy Cooperation between China and Central Asia”; Liu Xu (Renmin University of China) “State Competition or Business Competition: A New Analytical Approach to the Energy Cooperation in Eurasia”

3月1日 SRC 生存戦略研究セミナー Abel Polese (Dublin City University) “Informality in Eurasian spaces (and beyond): from economic to governance approaches”

3月1日 公開講演会 村上智見（SRC）「発掘調査で探るシルクロードの都市と文化」

3月4日 共同研究班「国家の生存戦略に関する共同研究」報告会 小森宏美（早稲田大学）「生存戦略のせめぎあい：エストニアを事例として」、吉村貴之（早稲田大学）「岐路に立つアルメニア共和国の政治」

3月7日 プロジェクト型「スラブ・ユーラシア地域を中心とした総合的研究」報告会 佐藤嘉寿子（帝京大学短期大学）、鈴木拓（帝京大学経済学部）「ハンガリーにおけるオルバーン政権下の年金制度」

3月9日 北海道中央ユーラシア研究会第146回例会 Hideya Matsuzaki (Tsuda University), Sergii Geraskov (Igor Sikorsky Kyiv Polytechnic Institute) “The Transformation of the Afghan War Memory in Post-Maidan Ukraine: History Textbooks and the Afghan Veterans’ Movement”

3月19日 Launching Workshop “Exploring Melodrama: Perspectives on Post-Socialist Space” Daisuke Adachi (SRC) “Beyond Peter Brooks: Exploring Melodrama in Post-Socialist Cultures”; Boris Noorddenbos (University of Amsterdam) “The Melodramatic ‘Mode’ in Post-Socialist Conspiracy Culture”

3月20日 EES / UBRJ 実社会共創研究セミナー 安野直（早稲田大学）「ロシアにおけるトランスジェンダーと社会」

3月26日 講演シリーズ「危機を生きるウクライナと世界」第3回 高橋沙奈美(九州大学)
「戦時下の正教会」

3月28日 客員研究員セミナー 乗松亨平(東京大学/SRC)「後期ソ連におけるヴラジー
ミル・ヴェルナツキーの受容(準備的素描)」

人事の動き

ヤスミナ・ガブランカペタノビッチ=レジッチ氏の着任

2024年3月1日にヤスミナ・ガブランカペタノビッチ=レジッチ氏がセンターの助教として着任しました。前職はサラエボ大学純粋芸術学院で、職位は准教授でした。ガブランカペタノビッチ=レジッチ氏は、母国のボスニア・ヘルツェゴビナ現代史をご専門としていますが、そのアプローチは実に多彩で、視覚芸術研究、ジェンダー研究など複数の方法論を用いて多角的に分析を行い、国際的にも重要な成果を挙げられています。研究対象は旧ユーゴスラビアの事例が中心となりますが、これまでは戦争を共通の切り口に日本との比較研究も行い、2014年に『視覚芸術に見る記憶政治：沖縄とボスニア・ヘルツェゴビナの現代芸術研究』という題目の論文で博士号を取得されました。

ガブランカペタノビッチ=レジッチ氏のキャリアは国際性と学際性に際立っています。これまで日本、イタリア、イギリスの3つの大学で修士号を取得され、上述の博士号はセルビアで修めました。沖縄県立芸術大学に留学され、またポスドクは学振研究員として同志社大学で研究を続けられるなど、日本での研究経験も豊富です。これはガブランカペタノビッチ=レジッチ氏の学問への飽くなき追究と大胆な行動力を示すものではありませんが、それを可能にするのは、日本語も含めた驚異的な語学力でもあります。この任期中にはボスニア・ヘルツェゴビナ戦争以前のムスリム人の政治表象に関する学際的な研究を遂行し、単著として刊行する予定とのことです。

母国で確固たる地位と職を持たれているにもかかわらず、いわば降格人事にもかかわらず、よりよい研究環境を求めて安定を擲つ勇氣は並大抵のことではありません。残念ながら、実力に合わない肩書に胡坐をかく人がしばしば見られる職種ではありますが、ガブランカペタノビッチ=レジッチ氏の人事は、研究者としてのさわやかな潔さと情熱を感じさせるものでした。ガブランカペタノビッチ=レジッチ氏の着任により、センターでは従来比較的手薄であったバルカン地域研究が強化され、また現在進行中の生存戦略研究へ新しい角度から貢献されることが期待されます。[野町]



辞令交付にて

研究員・事務職員の異動

菅原 侑子 事務補佐員 2024年1月1日(採用)

菅原 侑子 事務補佐員 2024年2月29日(退職)

長縄 宣博 教授 2024年3月31日(センターから東京外国語大学へのクロスアポイントメント終了)

黒木 英充 教授 2024年3月31日(東京外国語大学からセンターへのクロスアポイントメント終了)

ヤスミナ・ガブランカベタノビッチ=レジッチ 助教 2024年3月1日(採用)

井上 岳彦 特任助教 2024年3月31日(退職)

ベクトゥルスノフ・ミルラン 非常勤研究員 2024年3月31日(退職)

李 宏暉 学術研究員 2024年3月31日(退職)

大久保 恵 事務担当係長 2024年3月31日(転出)

青島 陽子 教授 2024年4月1日(准教授から昇任)

宇山 智彦 教授 2024年4月1日(センターから東京外国語大学へのクロスアポイントメント)

野田 仁 教授 2024年4月1日(東京外国語大学からセンターへのクロスアポイントメント)

松本 彩花 非常勤研究員 2024年4月1日(採用)

佐藤 友美 事務担当係長 2024年4月1日(転入)

2024年度の客員教授・准教授

公募していました2024年度客員教授・准教授は審査の結果、次の5名の方々をお願いすることになりました。[編集部]

客員教授

氏名	所属	研究テーマ
Andrey Kazantsev-Vaisman	The Institute for the Study of Global Antisemitism and Policy (ISGAP)	Contradictions in new Russia's foreign policy ideology of "anti-colonialism"
Andreas Renner	The history department of Ludwig Maximilians University, Munich	The Northeast Passage in Russo-Japanese Relations

客員准教授

氏名	所属	研究テーマ
塩谷 哲史	筑波大学人文社会系	1861年ポサドニック号事件と対日外交をめぐるロシアと欧米列強の関係
Diana Kudaibergenova	Department of Sociology, University of Cambridge	Why, how and under what circumstances do citizens of authoritarian states find ways to normalize their status quo
山脇 大	野村アセットマネジメント株式会社	ロシアのグリーンファイナンス市場に関する研究

第2回 マトリョーシカ・インタビュー

青島 陽子 教授

SRC の研究員に自身の研究や SRC への思いについて聞き出すインタビュー。マトリョーシカのように研究員の少し内側の姿に迫るコーナーを目指します。

第2回目は、昨年末に発足したウクライナ・ユニットのリーダーを務める青島陽子教授にお話を伺いました。



「ウクライナ」研究を標榜するのはスラ研として自然な流れ

—先生は昨年末に発足したウクライナ・ユニットのリーダーをされていますが、ユニット発足の核になるような視点はどのように生まれていったのでしょうか。

基本的には 2022 年 2 月 24 日の（ロシアによるウクライナ）侵攻です。もちろんロシアの危険性を予測されていた先生もいらっしゃいますが、あのようにウクライナ国境を戦車を取り囲んで一気に他国の領域内に入っていくという、全面的で大規模な侵攻を目の当たりにして、ものすごく大きな衝撃がありました。私達はスラブ・ユーラシア研究を専門に取り扱う日本で唯一の研究センターですから、この問題を考えなければいけない大きな責任がある立場だとみんなが共有していました。そのなかで、かくも重要な国ウクライナについて、センターとしても日本全体としても系統的で継続的な研究が弱かったということがあります。しかし、スラ研は、ロシア中心というよりはロシアを取り巻く国々や境界地域の動きからの観点を重視してきたので、そういう状況の中でも対応は早かったと思います。特に 2022 年の間は、ロシアが引き起こした侵攻・戦争という問題に対して、そしてウクライナという国の文化・歴史・政治・経済などについて、いろいろな形でセミナーやシンポジウムを組織したり文書を発表したり、かなり集中的に活動をした 1 年間でした。2023 年にもそれが続き、以前から企画していたセルヒー・プロヒー先生とオレイシャ・フロメイチュク先生の招へい等が実現しました。そうした研究活動の継続的な積み重ねの中で、ウクライナ研究ユニットを作っていこうという話が自然に出てきたという感じです。

—スラ研を外から見たときには、一般的にはロシア研究のイメージが強いのかもしいとも思っています。その組織が、ロシアがウクライナに全面侵攻したときにウクライナ研究にガシッと取り組むというのは、ロシア側に対して少し気まずさのようなものはあるのかなと思っていましたが。伺っていると、そもそもロシアを取り巻く国々の動きについて研究する立場から、今回についてはウクライナという国が重要であるにもかかわらず、研究が深まっていないというところに責任を見いだしたものだということで、スラ研の主観としては自然なことだったのですね。

全くそうだと思います。もちろんロシア研究は中核の一つとしてやっているんですけど、やはりスラ研が非常に得意としてきた、かつ世界に先駆けてやってきたのは、むしろ境界地域から見るスラブ・ユーラシア地域という研究ですね。中央アジア、イスラム、シベリア、極東地域、もちろん東欧、バルカン、バルト地域も。今はさらに広がって、北極圏、移民、ジェ

ンダーも。生存戦略研究ではロシアと中東との関係に視点を置いていますし、ロシアそのものというよりも、むしろ、ロシアを取り巻くより大きな文脈を見るという観点が一貫してあったので、ウクライナ研究に力を入れてくというのは全く自然なことです。しかも今回立ち上げたウクライナ研究ユニットというのは、正式名称はウクライナ「および隣接地域」研究ユニットなので、ウクライナのみというよりは、ヨーロッパからユーラシア全体に広がっていく可能性もあるような研究領域として捉えています。ですから、今までずっとロシアをやってきたのに、手のひらを返したというようなことでは全くないと思います。

インテリゲンツィア論から、境界地域を歩いて見えたロシアまで

—ここからは先生の研究活動の変遷についてお尋ねします。先生はロシア帝国の歴史、特に教育についてご専門で、それからロシア帝国西側の境界地域にも視野を広げて研究もされています。先生の関心の根底を探る上で、ちょっと雑な質問ですが、教育への関心が自然とそうした境界地域の絡まり合いに引っ張られていったのか、それとも境界地域の絡まり合いの議論を教育の観点から切り取るうとしたのか、どういったところに先生の関心のコアがあるのかなと思ひまして。

本当に最初のところから始めると、学部生の頃には、ロシアのインテリゲンツィア論に関心があったんです。反体制知識人というか体制や国家に抵抗・反対するというような知識人はどうやって生まれてくるんだろうという、本当に素朴なところから始まりました。それを専門的に研究するにあたり、教育制度について勉強し始めました。博士論文では、19世紀半ばのロシアの「大改革」での教育改革について書きました。その後、初等教育について掘り下げていく中で、どうも今のベラルーシやウクライナの辺りの地域では違う教育政策をとっているということに気づきました。これはなぜなんだろうと思ひ、そちらの方にだんだん関心が向かいました。

—そこで境界地域というワードが出てきたと。

そうです。もともとはいわゆる「ロシア史」を扱っていて、ロシアの中に多様な地域や民族があるという視点はそんなにあったとは言えないのですが、資料を見ていくうちに地域ごとにより政策に違いがあるということに気づくようになりました。そのなかで、今のベラルーシの地域にロシア帝国全体で最初の教員養成学校ができたということに気づいたんです。これは結構発見だったと思うんですね。それでその学校がどうやって出来たのかという経緯を何年かかけて調べて論文を書いたりしました。その辺りからだんだん西の方に関心が向いていきました。

もう一ついうと、2010年に、東京外国語大の篠原琢先生が取り組んでいたポーランドの境界地域を研究するプロジェクトがあって、そこに参加させてもらったんですね。その関係で、ポーランド東側の境界地域、つまりロシアの西側の境界地域を、中東欧の方々と一緒に見て周るという経験ができたんです。2010年以降、ウクライナも含めて、中東欧の様々な地域を訪問する機会を得られたのですが、それは非常に大きい経験でした。ですから、一つは研究上の漸進的な発展、もう一つは中東欧の人たちと一緒にロシアの境界地域を見るという経験、これが混ざって、ロシア西側の境界地域をロシアの側から見るという研究の視角を深めることができました。…リトアニアに行ったらですね、ロシアがとても嫌われていることを目の当たりにして。もちろん人にもよるんですが、その時はたまたまそういう経験があった。私にとってはそれは、世界観がひっくり返るような思いでした。それまで私は西洋史のなか



のロシア史という形で研究をしたのですが、西洋史のなかでロシア史というのは辺境 (periphery) なわけですね。そのなかで、いやいやロシアにもこういう面白さがあるのか、ロシアにはこういうロシアなりの論理があるのだとか、そういうことを説明するというようなことをやっていたように思うのですが、中東欧に行くとその感覚がぐらぐら揺れるような気がしました。中東欧の人たちから見たロシアは、西洋から見たのとはまたちょっと違う、生々しい感情があって、理屈では分かっていても、実際に体感すると戸惑いを感じました。しかし、よく考えれば、私たち (ロシア研究者) が鈍いんだなとも思いました。とはいえ、その頃はまだ、ロシアと中東欧を行き来しながら、もう少し対話を、という気持ちはずっと持っていたんですね。断絶してしまうのはむしろ危険なのではないかと。偉そうに上から言うつもりはありませんでしたが、気持ちとしては

そういうつもりでいました。ですから 2022 年の全面侵攻は私にとっても裏切られたという衝撃がありました。

歴史家のバトン？

一次に伺いたいのは、ウクライナ・ユニットのキックオフで招へいしたインディアナ大学名誉教授の黒宮先生は、先生とは世代の違う研究者だと思うのですが、同じ歴史学者・歴史家としてのバトンみたいなものを意識されることはあるのでしょうか。それとも歴史家というのはそれぞれの価値観、足で立っていて、それぞれの歴史観で歴史家をやっているというスタンスなのでしょうか。

結構個人プレーだと思いますね。人文社会系というのは個人的なスタンスが強く出るもので、それが各々違ってきます。個人の置かれている状況をどう捉えてどう研究に反映させていくのかというのは実に千差万別です。さらに、最近は国境を越えた人の移動も多いですから、国や世代では区切れないのだと思います。黒宮先生も独自の道を歩まれた方ですよね。あの世代の方にして海外に出て博士号を取得されて、その後もずっとアメリカで働いていらっしゃる。そういう方なので、やはりとても独特の視点をおもちだと思います。ですから、日本人の大先輩だというのはシンパシーとしては多少ありますが、それ以上に、偉大な歴史家の 1 人だと思って接しました。もちろん、こんなに偉大な歴史家が同じ日本人だと思えると励みにはなりますが、バトン…、私が日本人だからバトンを受け取るということではないかもしれません。

—それは業績というか、そういうものからにじみ出る思いみたいなところに共感してというか。

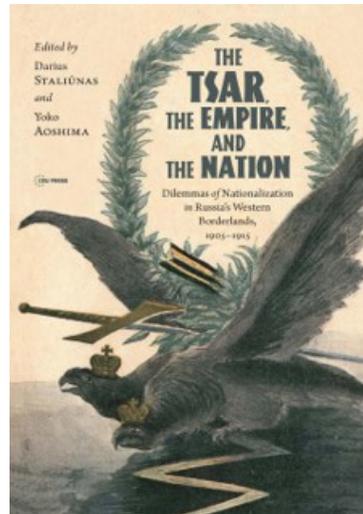
そうです。歴史研究というのは、資料をどれくらい見るかが全てというところがありまして、何の資料をどれだけ読んでそこからどう自分なりに歴史を再構築するかという学問なんですよね。それを徹底的にやってらっしゃる凄さが黒宮先生にはあります。ですからバトンを受け取ったというよりは…歴史家としてのあるべき姿を体現された方とお目にかかって改めて身が引き締まる思いがしたとか、そういう感じでしょうかね。

黒宮先生は、直接ではないにせよ長年スラ研のことを気にかけていたという不思議な繋がりがあったようです。すごい先生であるにもかかわらず今回来ていただけたことで、そういう特別な何か絆のようなものを勝手にこちらが思っているところもありますね。

外と内のネットワーキング、その推進力は

一意図しない繋がりとというか、そうした絆みたいなものの一方で、意図して繋がっていく場面についてはいかがでしょうか。文系の先生方はどういうネットワークの張り方をしているのでしょうか。特に歴史学者はそれぞれの単独プレーというお話はありましたが、とはいえ当然いろいろな繋がりもありますよね。どういった形でコミュニティが広がっていくのでしょうか。

そういうことに関して、やはりスラ研は先駆的だと思いますが、国際シンポジウムを開催するというのは重要だと思います。そこに世界中の、その瞬間の最高の研究者を招聘して、意見交換をします。運命的な出会いもあります。例えば私が共著論文集と一緒に出したリトアニアの Darius Staliunas さんは、国際会議からの繋がりで、2015 年の ICCEES 幕張大会のときに、研究仲間の岩手大学の梶さやかさんの知り合いを紹介していただいてパネルを組織しましたが、その方は結局諸事情で来日できませんでした。しかし、心残りがあり、後に彼女とリトアニアで国際会議を組織することになりました。その国際会議を実現させたら、その時に彼女の上司に当たる人が私に声をかけてくれて、共同研究やろうと言ってもらいました。それが Darius さんです。ですから、わらしべ長者というか、一つずつ繋いでいくような感じです。その後、東京で Darius さんと一緒に国際会議を開催し、それが論集になり、そこで知り合った人にまた別の機会のシンポジウムやセミナーに来てもらったり、学会でパネル一緒に組織したり。そういう形で広がったり、深めていったりします。



Darius Staliunas 氏との共著論文集

—私は URA ですが、一般的には理系の研究に伴走する役職なので、先生方がどう動いていて、文系 URA はそこに一体どういう関与ができるのか、手探りでやっているんですけど。

私は助教に近いポジションで 15 年前にスラ研で勤めたのですが、当時は手探りでした。文系のプログラム・オフィサーの先駆けだったのですよね。色々な先生たちから「そんなところに行って何になるの？」みたいに言われました。人文系ではそういう職種はあまり一般的ではなかったように思います。就いてからは、今の助教の皆さんがやってるようなシンポの組織や先生方のサポートからクリスマス会の司会までやりました。その時はずいぶん戸惑いがありましたね。

—どういった体制でセンターを運営するか、あるいは先生方のキャリアパスの在り方もなんでしょうけど、今と違いますね。

今は助教も研究員の方もすっかり一般的になりましたね。スラ研は色々な分野、色々な専門の色々な立場の人がいるのが特徴です。みんな 1 人 1 人違うと難しいこともあると思いますが、でもそこが面白さでもある。大学はどこもそうだと思いますが、常に数年おきに、新しいこ

とに対応して新しい体制に変化していかなければならず、これという固定のものがない。今も、国際共共拠点に応募する可能性も検討されていますよね。そうすると、これまでとは違う新しいことをやらなければいけません。将来、センターの公用語は英語になるんじゃないですかね（笑）。

—より多様な人で構成されるようになると、内側のネットワーキングも大事ですね。

元からそういう組織なんです、内側のネットワークも命みたいなどころがあって。内側にダイバーシティがありますからね。いいことだと思います。

私はすごくドメスティックな人間で、30歳くらいのときにスラ研のイベントに来た時に、私の英語が1ミリも通じなかったんですよ。それで衝撃を受けて、英会話学校に行ったぐらいです。ここからだ、と思って。20年経ってもちっとも上手くなりませんが、でも国際シンポを組織して、論集を出すぐらいはなんとか頑張れます。

—謙遜されてますが…「ぐらいは」というのが違和感でしかないです（笑）

自分でも信じられないし、今でもたいしてできていませんが、根性さえあればなんとかなります。最初に私が論集を出した時は、自分でも本当に怖くて、出版社の人にできるかどうかわかりませんと泣き言を言ったら、「どんな人も全部乗り越えて本出してるんだから、できるに決まってるだろう」と言われてですね、そうかなと思ってやりました。昭和的な根性で、やればできると思い込んで。何とかやっています。いい環境だと思うんですよ。同僚にすごい人たちがいるので、ちょっとでも近づけるように頑張ろうみたいにも思います。若い人は国境を簡単に超えますし、疾走感がある。そういう面白さ・良さがスラ研にはあると思います。15年前もそうですが、生き生きしてるというか、キラキラしてるというか。その分、みんなギリギリでやってるので、キーキーしてもいますけどね（笑）。

—泥臭く正攻法で、皆さんもがいて。それでいて令和の速度感でやっていると。

本当にそうです。今回のウクライナの件でも、コメンテーターとしてテレビに出るというような派手な形の活躍ではないんですけど、国際的な意味では、ものすごく対応早かったと思うんですよ。そこはやっぱり今まで培ってきた足腰の強さ、みたいなのはあったと思いますね。

（取材：田宮 彩也香）

青島 陽子（あおしま ようこ）

1973年生

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター教授

東京大学文学部卒業

東京大学大学院人文社会系研究科修士課程修了

同博士後期課程博士号取得

2007年 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター COE 研究員

2011年 愛知大学文学部 助教

2013年 神戸大学大学院国際文化学研究所 講師

2016年 同准教授

2020年 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 准教授

2024年 同教授

2023 年秋のバルカン諸国訪問回想

野町 素己 (SRC)

2024年3月末でセンター長の役割を終えることになりました。責任あるバトンを長縄研究員に渡すにあたって、今、2年間の出来事を思い返しております。センター長として、普段は管理や問題対策に翻弄されてばかりいたので、気分転換と言えば、センターでの業務の間に何とか押し込んだ、遅々として進まない研究に関わる短期出張でした。ただ、センター長は可能な限りセンターにいてほしいという空気は常に感じましたし、出張自体も「オンラインによる会議・投票・授業が可能であるため支障はない」ということが前提でした。したがって、専任教員会議が重なった場合は、日本の時差に合わせて早朝になり、隣の部屋に声が響かないように気を付けながら議事を進行することもありましたし、また人事関係の会議をブルガリア国立図書館の廊下で小声で行ったこともありました。

それらはもはや私にとって「思い出」の領域に移りましたが、50代近くなり体力・記憶力が著しく落ち、ちょっとした体験も書いておかないと急速に忘れてしまいます。昨今スラブ語文章語成立史やスラブ語研究史に関わることがにわかに増えたのですが、様々な研究者の見解を理解するために、刊行された著作だけではなく、手紙類、日記、手稿などから当時の研究者同士の影響関係や接触を明らかにすることで、表面上やや唐突に思われていた出来事にも背景があり、従来の理解と違う一面が見えることを痛感しています。また、私が今まで文法研究のために読んでいた著作のちょっとした記述も、歴史的・政治的にみて別の理解が可能なことも増えました。したがって、当事者や関連研究者が存命の場合には聞き取り調査を行いましたし、資料収集のために図書館で古新聞を漁ったり、文書館で個人ファイルを眺めたりすることが増えました。ほとんど自己満足の備忘録であることは承知しているものの、このような雑文でも将来どなたかに役立つこともあるかもしれない、これをきっかけに興味を持った人が私に相談に来るかもしれないと思い、書き残しておきたいと思います。

2023年10月にブルガリアの首都ソフィアを訪問しました。その第一の目的は、国立図書館でチトー・スターリン決裂（1948年）以後に、在ブルガリアのユーゴスラビア政治亡命者の新聞を集めるためです。特に1949年から1954年までセルビア・クロアチア語とマケドニア語で刊行された『前進！』という新聞が対象でした。その新聞のマケドニア語が興味深く、本土のマケドニア標準語とは異なり、キリル文字はブルガリア語風で、特に初期は言語形式もマケドニア語の標準語とは異なるものの、マケドニアの首都のスコピエ方言との近さを感じさせる形で書かれています。当時のソ連のスラブ語研究でマケドニア語の文献を使うときは、マケドニア本土の同時代の文字資料ではなく、在外マケドニア人による親スターリンのプロパガンダ資料が用いられました。例えば、文豪レフ・トルストイの曾孫にあたるスラブ語学者ニキタ・トルストイ（1923-1996）は、そのキャリアをマケドニア語研究から始めましたが、1950年に執筆した卒業論文の現代マケドニア語の例文は上述『前進！』から取っています。この新聞自体は、トルストイを除き、言語学的な研究の対象にはなっていないようですが、私の関心はスターリン死後にも同じような言語使用が続いたのかということでした。図書館でコピーを頼むとお金も時間もかかるので、持参したiPadで2日間、

もう立てないくらい写真を撮り続けた結果（有料で自己申告）、資料は概ね集められました。まだ全く手を付けていないので、センター長職から解放されたら、この新聞の読み込みと分析が課題の一つになると思います。

第二の目的は、国立文書館でマケドニア語・方言を巡る見解を示していたブルガリア人研究者のファイルから資料を集めるためです。これは文書館のサイトで有無がある程度分かっていたのですが、私が最も関心があったのはリュボミル・ミレティッチ（1863-1937）とステファン・ムラデノフ（1880-1963）の資料でした。両方とも優れた言語学者ですが、同時に際立ったナショナリストでもあり、マケドニア方言の独立性に強い反対の意見を持っていたことは有名です。彼らが研究者同士の交流レベルでどのようなことを述べていたのか関心がありました。前者のファイルは非常に少なく、それは第二次世界大戦でほとんど焼失したからだそうです。後者は大量にありましたが、マケドニアに関わる部分はそこまで多くなさそうですが、時間的に資料を広く見ることは出来なかったので、継続調査になります。ただ、文書館館長で歴史学者の方が、なぜこの二人のフォンドに興味があるのか尋ねられ、一つ依頼されました。19世紀から20世紀初頭に活躍した人文学者ヨルダン・イワノフ（1872-1947）が収集したマケドニア・オフリド方言調査のノートを渡され、これを分析してほしいというのです。当然、現在のオフリド方言とどのように違っているかということが焦点になりますから、マケドニア人の研究者と連携して進めるのが最も効率的で確実だとは思いますが、ただ依頼人との間でありとあらゆる問題を引き起こしそうなので、慎重にやり方を考える必要があります。これもセンター長退任後の複雑な課題の一つです。

今回のブルガリア訪問はすべてがハイライトでしたが、その中でも鮮烈だったのはバルカン言語学の泰斗ペティヤ・アセノワ先生と古ブルガリア文学史の専門家アナ・ストイコワ先生との面会でした。アセノワ先生は1989年に刊行された金字塔的著作『バルカン言語学』で有名な研究者です。恩師は比較言語学でやはり著名なウラジミル・ゲオルギエフ（1908-1986）で、彼の指導の下、バルカン言語研究者として出発しました。私が彼女に初めてお目にかかったのは2016年のモスクワで行われた学会で、アルバニア・コソボ・マケドニアのムスリムのスラブ語方言とその標準化について発表したところ、アセノワ先生が即座に反応され、その方言が独自の言語ではなく、ブルガリア語の方言であることを会場に説明されました。この反応はブルガリア人言語学者にある意味典型的で、アセノワ先生の著書でもマケドニア語が独立した言語として扱われないため、学会のプログラムで彼女の名前を見た瞬間から批判を



「セルフイを撮りましよう」とアセノワ先生

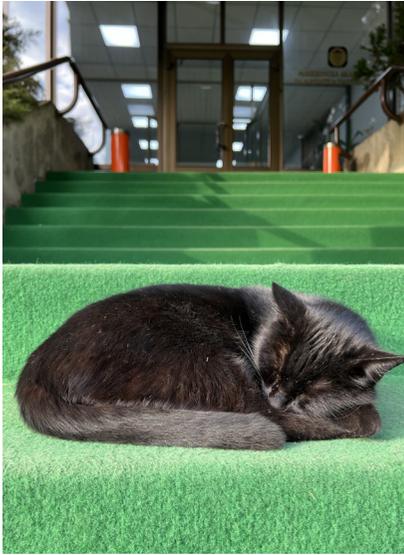
覚悟していました。予想通りの質問を受けた私は、「だから私はあなたがいる前でこの発表をしたくなかった」と言ったら、ご本人も含めて会場が笑いに包まれ、場が和んで有耶無耶になったということがありました。

アセノワ先生とはその後も、今回お目にかかるまで、数回会う機会がありましたが、私に政治的な批判をされることはなく、逆に内容に対する肯定的なコメント、また先生の著作を下さる

など、私にとっては過分に親切であるように思われました。その背景として、先生が親日家であるということもきっとあります。その片鱗が見えたのは、2023年4月で、アセノワ先生のオンライン講義を私が組織した時のことです。講演の謝金をお支払いするために口座番号をお伺いすると、2011年の東日本大震災で被害にあわれた方はまだまだ困難を抱えているから、謝金を寄付してほしいと言われました。なお、1990年代に佐藤純一先生がアセノワ先生を東京大学教養学部へ招へいし、バルカン言語学の集中講義を行ったことがあります。今回お目にかかったときアセノワ先生は当時の思い出を懐かしそうにお話になり、佐藤先生はお相撲がお好きだとか、授業が充実するといつ終わるかわからず、次の授業の準備が大変だったなど、当時の様子など興味深く伺いました。そこで突如思い出されたのか、一つ相談を持ち掛けられました。当時アセノワ先生の授業に出ていた学生ととても仲良しになったのだけれども、なぜか音信普通になってしまったと、もしかしたら何か傷つけてしまって嫌われたのかもしれないが、その人を何とか見つけてほしいとのことでした。私がおの方の名前が聞き取れず、似たような名前も思いつかなかったため、当時の写真をお送りくださるようお願いしました。帰国後写真が送られてきましたが、写真を見ても誰かわからなかったため、京都大学の服部先生にお伺いしたところ、恐らく該当する方のお名前を教えてくださいました。また、当時大学院生でアセノワ先生の講義を聴講していた新潟県立大学の柳町先生にもお尋ねしても、やはり同じお名前が出てきたので、その方にご連絡をとり、今回のアセノワ先生からの伝言をお渡ししました。その後お二人は約30年ぶりの旧交を温められたようで、この出張の予想外の「成果」になりました。

アセノワ先生は東大駒場キャンパスの銀杏が秋に本当に美しかったと思いだされ、近くの公園に銀杏の木があるから一緒に見ましょうと言われたので、公園を散歩しましたが残念ながら銀杏の木は見つかりませんでした。私はその後、11月に駒場キャンパスに出張がありましたので、銀杏の葉を数枚拾ってお手紙と一緒に送りしたところ、いたくお喜びになったようで、感謝のお手紙をいただきました。

アセノワ先生とお別れした後30分後くらいに、上述のアナ・ストイコワ先生と面会しました。この方には初めてお目にかかりましたが、彼女の専門のことでお目にかかったのではなく、ご尊父のストイコ・ストイコフ（1912-1969）のことです。ストイコフはブルガリア言語学史上で最も優れた方言学者で、ソ連のブルガリア語学者サムイル・ベルンシュテインの盟友でした。ストイコフはその著書『ブルガリア方言学』におけるマケドニア方言に関する解説が原因で、冷遇された経験があります。嘗てベルンシュテインと一緒にピリン・マケドニア（現在ブルガリア領内にある歴史的なマケドニア地方の一部）を旅行したときに、ベルンシュテインが現地の人々のアイデンティティなどいろいろ聞きだしてはしないかと、ストイコフはひやひやしたそうです（ベルンシュテインの日記によると、ベルンシュテインはストイコフの目を盗んでピリン・マケドニア人と接触し、彼らがブルガリア・アイデンティティを強制されていることを耳にします）。ベルンシュテインとストイコフの交流は密接でしたが、その全貌はわかっていません。そこでストイコワ先生に私の研究テーマの一つを説明し、思いきってご尊父の手紙類や資料を見せていただけないかとご相談しました。ストイコワ先生は快諾されましたが、ベルンシュテインとの文通だけでも膨大な量があり、整理が必要なので、2024年度中に別の機会を設けることをご提案されました。ソ連のブルガリア語研究史は、特にマケドニア問題と関わり、興味深いことばかりですので、これらの資料から何か



マケドニア学士院の入り口で
チェックする黒猫

新しい展開があるのか、今から楽しみにしています。

ブルガリアの後は北マケドニアのスコピエに行きました。こちらはマケドニア学士院の文書館で、現代マケドニア文章語の父ブラジェ・コネスキ（1921-1993）のファイルを検査するためです。彼は言語学者でしたが、優れた詩人でもあり、自らの著作でマケドニア語の存在を世界に確立していきました。夏に文書館の水道管が破裂して水浸しになり、ファイル類が大分傷んだようですが、コネスキ・ファイル30箱は概ね無事だと事前に説明を受け、私は文書館に到着するや否やその箱を一つずつ開け、資料を見始めました。予定の3日間でそれらを見終わりましたが文書館の職員にお別れの挨拶に行くと、「君はマケドニア語史を研究するのであればコネスキの資料をもっと見ないといけない。未整理のコネスキ・ファイルがあと33箱あるが見たいか」と言うので、「なぜこの人はこんな大事なことを先に言わないのか」と心の中が半狂乱になりましたが、私がちゃんと研究するかどうか見極めてから提案したかったのだと思うことにしました。なお、2024年2月に改めて未整理のコネスキ・ファイルに全部目を通すことができましたが、今度も帰り際に「1980年に大統領を務めたラザル・コリシェフスキのファイルがあるが見たいか。彼もマケドニア語関連で資料をたくさん集めていたが、これも未公開だ」と11月と全く同じ展開になりました。呆れるような、しかしまた来る機会を作ってくれたような複雑な気持ちですが、とにかく調査に戻るしかないと思います。ただ、まずはこれまで集めた資料を今年予定している学会発表や6月の公開講演会で扱う予定ですのでご期待ください。なお、スコピエでは私のエッセイでもたびたび登場するスラブ学権威ズザナ・トポリンスカ先生ともお目にかかり、カシュブ語研究史に関する聞き取り調査を行いました。こちらは既に執筆済みの論文の改訂稿で情報を付け加える予定です。

北マケドニアの後はセルビアのベオグラードに行きました。目的はいくつかありましたが、まずはセンターが2022年に協定を結んでいるセルビア学士院のセルビア語研究所との共同研究についての意見交換、続いて同研究所で私の講義を研究所員に行うためでした。私は講義で18世紀末から19世紀初頭のセルビア語文章語の状況の分析を行いました。よく考えたら、セルビア語研究のまともな蓄積がほとんどない国の研究者の発表をちゃんと聞いてくれるかとやや不安になりましたが、それでも実際には討論は充実したものであり、私にとっても大いに収穫がありました。その講義の後、文字通り20分後に、今度はベオグラード大学文学部でマケドニア標準語形成史に関わる私の講演会がありました。こちらは反応が弱めで「マケドニア語の将来についてどう思うか」などといった、今の講義とどう関係あるのか不明の質問などに目が白黒しましたが、親切心からしてくれたのだと思います。

最も大きな目的は2021年に他界した恩師のプレドラグ・ピペル先生の記念講演会を立ち上げるためでした。発案は私でしたので、いずれセルビア人研究者に委ねるにしても、最

初の段階の責任者としてご遺族のお考えを伺い、それを尊重して進める必要がありました。奥様とお二人のお嬢様とお目にかかり、私の提案を聞いていただきました。ご遺族は提案を本当に喜ばれ、実現に向けてモラル・サポートをしてくださることでした。セルビア・スラブ学連絡協議会の投票でこの件は採択され、2024年に第1回を組織する予定で調整が始まっています。

昨今高騰する航空券代を押さえるべく複雑なルートにすると出張日数が増えるという問題もあり、かといって平日は1週間程度しか留守にできないため、現地では非常に駆け足になり、調査は大いに雑で将来への積み残しも多く、また足しげくバルカンに通う必要があります。



スコピエではトポリンスカ先生から聞き取り調査もしました

学界短信

学会カレンダー

2024年	5月16-18日	ASN (Association for the Study of Nationalities) 28th Annual World Convention 於コロンビア大学 https://www.asnconvention.com/
	6月6-9日	CESS (Central Eurasian Studies Society) Annual Conference 2024 於トゥラン大学 (アルマトウ) https://centraleurasia.org/conferences/annual/
	6月22-23日	日本比較政治学会第27回研究大会 於立命館大学大阪いばらきキャンパス https://www.jacpnet.org/convention/
	6月28-29日	The 12th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies 於漢陽大学校 https://www.jarees.jp/plugin/blogs/show/1/90/487#frame-90
	6月29-30日	比較経済体制学会第64回大会 於大阪経済大学 https://www.jacesweb.com/conference2024/
	7月18-19日	スラブ・ユーラシア研究センター 2024年度夏期国際シンポジウム 於SRC
	9月12-15日	CESS' (Central Eurasian Studies Society) North American Conference 於シラキュース大学 https://centraleurasia.org/2024/save-the-date-cess-north-american-conference-at-syracuse-university-sept-12-15/

	10月5-6日	ロシア史研究会 2024 年度大会 於東京大学本郷キャンパス https://www.roshiashi.com/annual-conference
	10月26-27日	日本ロシア文学会第74回全国大会 於創価大学 https://yaar.jpn.org/
	11月9-10日	ロシア・東欧学会 2024 年度研究大会 於早稲田大学 https://www.jarees.jp
	11月15-17日	日本国際政治学会 2024 年度研究大会 於札幌コンベンションセンター https://jair.or.jp/
	11月21-24日	ASEEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) 56th Annual Convention 於ボストン https://www.aseees.org/convention
2025年	7月21-25日	XI ICCEES (International Council for Central and East European Studies) World Congress 於ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン https://www.iccees2025.org

[編集部]

大学院だより

北海道大学大学院文学院スラブ・ユーラシア学研究室では、3月に4名が修士課程を修了し、4月には7名という多くの新入生を修士課程に迎え入れることができました。在籍者の研究テーマ等は次号でお知らせする予定です。[編集部]

日本ロシア文学会若手企画賞受賞ワークショップ「〈暴力〉から問う：19-20世紀ロシア文化における暴力表象の横断的検討」開催報告

2024年1月27日(土)、ワークショップ「〈暴力〉から問う：19-20世紀ロシア文化における暴力表象の横断的検討」(於スラブ・ユーラシア研究センター大会議室)が開催されました。本ワークショップは、日本ロシア文学会による公募型の若手会員支援プログラム「日本ロシア文学会若手ワークショップ企画賞」(2023年度)の受賞・助成を受けたものです。本センターの大学院からは上村、松元が報告を行いました。会場では10数名、オンラインで40名前後の方にご参加いただきました(登壇者・コメンテーターを除く)。

ワークショップの内容は以下の通りです。

Ⅰ. 「ロシア帝国と暴力なるもの」

上村正之(北海道大学大学院博士後期課程)「叙事詩的であること、暴力的であること:ゴッリ『タラス・ブーリバ』の受容史をめぐって」

深瀧雄太(京都大学大学院博士後期課程)「レスコフにおける暴力の諸相」

大崎果歩(東京大学大学院博士後期課程)「レフ・トルストイにおける暴力とキリスト教」

II. 「戦争と革命の世紀」再考

田村太(京都大学大学院博士後期課程)「世紀転換期の「暴力論」とサヴィンコフ／ロープシン」

松元晶(北海道大学大学院博士後期課程)「戦う「周縁」:中央アジア映画に見る戦いの表象」

大月功雄(立命館大学大学院博士後期課程)「ロシア映画理論と戦争映画:今村太平の記録主義リアリズムをめぐる」

コメント

越野剛(慶応義塾大学准教授)

平松潤奈(東京大学准教授)

ロシアの社会革命党(エスエル)の指導者・作家であるロープシン(本名ボリス・サヴィンコフ)をご専門としている田村太さん(京都大学大学院)と、ワークショップの企画を構想したのは2021年頃でした。文学上のコサック表象を研究している上村(北海道大学大学院)と共通のテーマを話し合った際、暴力というテーマが頭に浮かびました。それから2022年2月24日にロシアのウクライナ侵攻が起き、ロシア文化と暴力という問題は極めてアクチュアリティを帯びることになりました。

2022年3月に申請書を提出した際、進行中の暴力と本ワークショップをどのように結びつけるべきかについて頭を悩ませました。しかし同時に、そもそも暴力の定義とは何か、どのような区分が可能で、どのような機能を有しているか、また表象された暴力は何を目的としているのか等、前提としてより本質的な問いが重要であるように感じられました。そして、ロシアを単に暴力的とみなすような皮相な議論を避けつつも一例えば20世紀全体が「戦争と暴力の世紀」と呼ばれました一、同時にロシア・ソ連文化に特徴的な暴力の扱いを考察する必要も、企画段階で浮上しました。

各報告は、そうした問題意識に応じたものになったと思います。

第一部「ロシア帝国と暴力なるもの」にて、上村報告はニコライ・ゴーゴリの文学作品を参照し、暴力表象が叙事詩というジャンルの要素を纏い、美学化される様相を論じました。深瀧報告では、ニコライ・レスコフの文学テクストにおける暴力の諸相を、暴力論の古典であるヴァルター・ベンヤミンの『暴力批判論』(1921)に関連づけて論じました。大崎報告では、非暴力の思想家であるレフ・トルストイから見た、ロシア帝国における国家的暴力の問題を取り上げました。

第二部「戦争と革命の世紀」再考では、革命家、中央アジア、そして日本という視点から暴力について検討しました。田村報告は社会革命党の指導者ボリス・サヴィンコフによる、今日的意味とは異なる「テロリズム」の概念を論じました。松元報告では、ソ連映画における中央アジア人の表象を、とりわけ独ソ戦を題材にした作品から取り上げ、カザフ人、クルグズ(キルギス)人が表象の客体から主体にならんとする過程を追いました。大月報告では映画批評家・今村太平(1911-1986)の戦争映画批評を取り上げ、スペクタクル性を追求する日中戦争・太平洋戦争時のプロパガンダ映画を批判し、作られた暴力表象を「異化」しうる記録映画について論じる今村の批評に、日本のファシズム的状况に介入する姿勢を見いだしました。

第一部については越野剛先生（慶応義塾大学）から、第二部については平松潤奈先生（東京大学）から、それぞれコメントと質問が寄せられました。その後、会場・オンラインから質問を募り、充実したディスカッションになりました。

今回のワークショップについて、何らかの形で報告論集を出せればと考えております。[上村]



ワークショップ後の集合写真

大学院修了者の声

貴重な2年間

山田 愛実

2年前の春にスラ研のオリエンテーションに出席したときには、周りの院生の方が異次元の存在に思え、本当に自分は合格したのだろうか、これからきちんと2年間やっていけるのだろうか…と不安でいっぱいでした。ですが2024年3月現在、修了が確定してほっとしながらこの文章を綴っています。

ふりかえてみると、スラ研での2年間は、学部時代とは比べ物にならないほどの予習・課題に追われ、その忙しさの中で自分の研究・就活も同時並行するというかなりハードなものでした。途中、何度も無理だ…と思いましたが、先生方や先輩方に助けていただき、なんとかやってくることができました。

上記のように院生の2年間は大変ではありましたが、非常に充実したものでもありました。たとえば必ず研究報告をすることになっている金曜2限の総合演習では、様々な研究をされている院生の方々、先生方の研究報告から刺激をうけましたし、自分の報告に対する専門が異なる方からのご指摘や質問をいただくことで、自分の研究を客観的に見直す機会となりました。また各演習でもスラ研の皆さんとスラブ・ユーラシア地域の歴史、文化、政治などについて学び、議論できたことも貴重な経験でした。

研究環境の面では、スラ研は院生一人一人にデスク、本棚（段数は決まっている）が割りふられるので、文献や資料の管理、論文執筆には非常に便利でした。また研究室で先輩方とお話する中で、研究のヒントが得られたこともありましたが、行き詰っているときも頑張ろうと立ち直ることができました。

自分は4月から研究とは関係のない企業で働きますし、同期よりも社会に出るのは遅くなりましたが、先述したようにここでしかできない貴重な経験をした2年間だったので、学ぶ選択をしたことに後悔はありません。もし少しでも研究を深めたいという思いがあり、状況がゆるすのであれば、大学院進学という選択肢を考えてみてはいかがでしょうか。

この2年間かかわってくださった皆様に心から感謝申し上げます。かけがえのない2年間が与えられたことに感謝しつつ、春からは社会人として与えられた仕事に誠実に取り組んでいこうと思います。

図書室だより

「チェコ文化コレクション」のご紹介

センターでは、2020年度に、浦井康男北海道大学名誉教授より、その所蔵するチェコ関係の図書コレクション1500冊余りを格安価格で購入し、2022年度にその整理を終え、センター図書室の「チェコ文化コレクション」として公開しています。

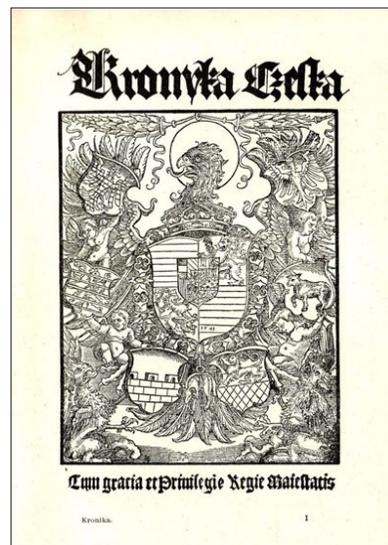
今回、今後の活用のため、元所蔵者の浦井先生にお願いして、コレクションの来歴や内容などについて紹介させていただくことにしました。[兔内]

チェコ文化コレクション

浦井康男（北海道大学名誉教授）

私がチェコに留学したのは共産党政権の時代でした。留学当初のテーマは、チェコ文章語の伝統が途絶えた後、民族復興期にチェコ語が復活しその後発展していった過程と、ロシアでのラヂシチェフ～カラムジン～プーシキンでのロシア文章語の近代化を比較することでした。ただ当時の日本ではチェコに関する知識はあまり普及しておらず、何か述べようとするにそれについて説明する十ぐらいのことを説明する必要がありました。

そのためプラハで上記のテーマに沿った語学研究書を集める傍ら、チェコ文化一般の書籍も集めることになりました。当時チェコの古書店は、それがどんなに需要や人気があっても、すべての古書を定価の1/3で買い取り、2/3の値段で売っていました。また古書の補充は毎週特定の曜日で、その日に本棚に新しく並べますが、目ぼしいものが買われてしまっても、次週まで何も補充せずに過ごします。私は毎週補充日に、



ハーイエク年代記の表紙

P.L.Horecky¹の文献目録を片手に古本屋を巡って、足で本を探し集めました（今日のネット販売は夢のまた夢の世界です）。

このようにして集めた書籍は、5kgずつの書籍小包にして日本に送りましたが、これらの総計は1トン近くありました。今回センターに入れたこのコレクションの中で、まとまったシリーズものとしては、人物評伝 (Odkazy pokrokových osobnosti naší minulosti)、国民文庫 (Národní knihovna) が各50冊ほどあります。前者はコスマスから20世紀中頃までの、チェコの著名人の評伝とその作品や仕事を紹介したもので、人物研究の基礎資料になり、後者は文学作品ですが、版が一番しっかりしたもので、翻訳の底本として使われています。

民族復興関係ではこれに関する歴史書の他に、ドブロフスキー、ユンクマン、シャファジーク、パラツキーなどのかかなり細かい資料まで、また年代記シリーズや古代・中世チェコ語の文献、チェコ・スラヴ言語学、近代チェコ文学の個人全集・選集、また興味を持ったフスとフス派やプラハ学 (Pragensia) などがあります。このコレクションには新しい研究書は含まれていませんが、基礎資料としては充実しています。

チェコは人口一千万人ほどの小国ですが、民族復興期以来の伝統で、民族のアイデンティティを言葉に求め、言語文化 (jazyková kultura : 国民の言語意識を養い高めること) が盛んです。そのため著名な言語学者が一般読者に向けて、チェコ語についての教養書を数多く書いていて、これらはかなり留意して積極的に集めました。

最後にこのコレクションの目玉は何といても、ハーイエク年代記 (V. Hájek z Libočan, *Kronika česká*) です。1541年に出版されたこの年代記は、コスマス年代記以来の集大成と言われ、その歴史性が疑しい所も多いですが、文学的にはすぐれたもので、民族復興期にはそこから多くの文学・芸術のテーマが引き出されました。この年代記は何度も出版されましたが、大部 (大判で950頁以上) のため抜粋の形になり、全文が読めるのは初版か、民族復興期に当時の愛国的貴族によって初版の形のまま復刻された、1819年の第二版しか最近までなく、チェコでも相当な稀観本となっています。このコレクションには第二版が入っています。

1 おそらく、Horecky, Paul L. (ed.) *East Central Europe: a Guide to Basic Publications*. Chicago: The University of Chicago Press, 1969. のことと思われるが、現在確認できなかったとのことである (兔内註)。

2 初版と2版はチェコ語がゴシック体の活字で印刷され、かなり読みにくいですが、2013年にこの年代記の全文、注、索引、CD付きが出版された。V. Hájek z Libočan, *Kronika česká*, připravil Jan Linka, Academia, 2013, 1447s.

編集室だより

Acta Slavica Iaponica

第44号をようやく世に送り出すことができました。今号には、ASI Conversation という新しいセクションを設けました。各論文等の本文は、雑誌のサイトからご参照ください。<https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publicitn/acta/44/index.html> 青島研究員の尽力で、2022年12月1日のセンターで開催されたラウンドテーブル「東部ヨーロッパ境界地域に関する歴史研究の再考:ロシアによるウクライナ戦争の余波」の議論を紙面で再現することができました(この研究会については、センターニュース167号9-10頁を参照)。

第45号は現在、投稿者による改稿が進んでいるところです。[長縄]

ARTICLES

Кирилл Зубков

Поражение как победа: Нарратив о Крымской войне и историческая память в Российской империи второй половины XIX века

Ranko Matasović

Dalibor Brozović's Typology of Slavic Standard Languages and the Status of Standard Croatian

Ilja Viktorov

Political Economy of the Contemporary Art Market in Russia, 1990–2022

Tomasz Kamusella

Central Europe's Limits in the North and the South

Георгий Ахиллович Левинтон

Мандельштам и Достоевский: О некоторых элементах темы Достоевского в Третьей воронежской тетради

ASI CONVERSATION

Catherine Gibson, Anton Kotenko, Andrei Cușco and Yoko Aoshima

Navigating the Eastern European Borderlands in the Aftermath of Russia's Invasion of Ukraine

BOOK REVIEWS

Mikhail Alexseev

Kathryn E. Stoner, *Russia Resurrected: Its Power and Purpose in a New World Order* (New York: Oxford University Press, 2021), xix+317 pp.

Sayaka Kaji

Dangiras Mačiulis, Rimvydas Petrauskas, and Darius Staliūnas (translated by Beata Pia-secka), *Kto wygrał bitwę pod Grunwaldem: Tradycja grunwaldzka wśród narodów Eu-*

ropy Środkowo–Wschodniej [Who Won the Battle of Grunwald? Tradition of Grunwald among the Nations of Central and Eastern Europe] (Warszawa: Instytut Pamięci Narodowej-Komisja Ścigania Zbrodni przeciwko Narodowi Polskiemu, 2020), 360 pp.

Oleksandr Avramchuk

Olga Khomenko, *Dalekoskhidna odisseya Ivana Svita* (Kyiv: Laurus, 2021), 584 pp.

Michiko Komiya

Marina Balina and Serguei Alex. Oushakine, eds., *The Pedagogy of Images: Depicting Communism for Children* (Toronto: University of Toronto Press, 2021), 548 pp.

Mojca Kumin Horvat

Marc L. Greenberg, “*Prekmurje Slovene Grammar*”: *August Pavel’s Vend Nyelvtan (1942)* [Critical edition and translation from Hungarian, *Studies in Slavic and General Linguistics*, Volume 47] (Brill; Leiden, 2020), 215 pp.

『境界研究』

2024 年春に『境界研究』No. 14 が発行されました。[岩下]

《論文》

大坂 拓 近代北海道における〈アイヌ〉の境界：松前地西在相沼内村に生まれたサモテの事例を中心として

井出晃憲 メディアが映す日本統治下の樺太観光：「オタスの杜」先住民観光をめぐる言説を中心に

南部広孝、楠山研 中国・モンゴル国国境地域における教育交流・協力の展開に関する考察：中国側の取り組みに注目して

《研究ノート》

中津雅昭 インドの「世界大国化」と開発協力：政治優位のインド型開発協力の展開

《ディスカッション》

植田暁 「シベリアの呪い」は中央アジアに及ぶのか？：分析視点としての Temperature per capita の有用性の検討

《書評》

斎藤慶子 アン・セアシー著『冷戦中のバレエ：米ソ交流』（英語）

鈴木一人 川久保文紀著『国境産業複合体：アメリカと「国境の壁」をめぐるボーダースタ

会議

センター協議員会

2023 年度第 8 回協議員会 12 月 25 日（オンライン開催）
議題

1. 教員人事について
2. 特別研究学生について
3. 内規の制定について

2023 年度第 9 回協議員会 1 月 15 日（オンライン開催）
議題

1. 教員人事について
2. 令和 6 年度客員研究員の採用及び称号付与について

2023 年度第 10 回協議員会 1 月 22 日～ 23 日（メール開催）
議題

1. 教員人事 1（クロスアポイントメント教員）について

2023 年度第 11 回協議員会 2 月 26 日～ 3 月 4 日（メール開催）
議題

1. クロスアポイントメント人事について

[事務係]

誰が 何を どこで

2023 年度の専任教員、助教、日本人客員教員、非常勤研究員（五十音順）の研究成果・研究余滴のアンケート調査を以下のようにまとめました。[編集部]

青島陽子 ㊦ 4 その他業績（著書形式） ▼ 帝国支配の時代：ロシア帝国、ハプスブルク帝国下のウクライナ（黛秋津編『講義ウクライナの歴史』100-131, 山川出版社, 2023） ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ The Imperial Policy on the Native Language Education in Private Schools of the Polish and Baltic Provinces: At the beginning of the Twentieth Century, BASEES Conference 2023, Glasgow, the UK (2023.4.1) ▼ Empire, Nation and Decolonization in the Context of the Russo-Ukrainian War, SSEES/SRC Workshop “Ends of Empires: Crisis and Resilience in the Long Twentieth Century,” SSEES, University College London (2023.12.11)

安達大輔 ㊦ 2 その他業績（論文形式）(5) その他 ▼ Let's Get Melodramatic: Studying the Genre All Over the Globe, *ASEEES NewsNet*, 63(6):3-7 (2023) ▼ コロナ禍での研究を振り返って『日本 18 世紀ロシア研究会年報』20:50-54 (2023) ▼ 浦雅春先生を悼む『スラブ・ユーラシア研究センターニュース』169:37-39 (2023) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ The Problem of Reproduction in Gogol's *Evenings on a Farm Near Dikanka*, The 15th International Scientific and Practical Conference "Gogol Readings," Poltava V.G. Korolenko National Pedagogical University (online), (2023.5.11) ▼ サイエンス・トーク「作家ゴーゴリの知られざる故郷」, 第 65 回 北大祭研究所・センター合同一般公開「知られざるスラブ・ユーラシア」, SRC (2023.6.3) ▼ Teaching Russian Literature and Culture in Japan, CNCSI Third Virtual Laboratory "Teaching the 19th Century from a Transnational Perspective," online, (2023.9.4) ▼ Slavic Literature and Culture Studies in Japan and SRC after Russia's Invasion of Ukraine, The 26th Hokkaido University-Seoul National University Joint Symposium: Slavic-Eurasian Research Center & Institute for Russian, East European, and Eurasian Studies, SRC (2023.10.31) ▼ Orientalist Colonialism and Domestic Colonialism: A Nineteenth-Century Case, Roundtable "Decolonizing Melodrama in Russia: Gender and Ethnicity," 55th Annual Convention of Association for Slavic, East European and Eurasian Studies (ASEEES), Philadelphia (2023.12.2) ▼ Beyond Peter Brooks: Exploring Melodrama in Post-Socialist Cultures, Launching Workshop "Exploring Melodrama: Perspectives on Post-Socialist Space," SRC (2024.3.19)

諫早庸一 ㊦ 1 学術論文 ▼ 기후변화가 제국을 흔들었을까? 1270-80 년대 몽골 사례 연구 / Did the Climate Change Shake the Empire? The Case of the Mongols in the 1270s and '80s, 생태환경과 역사 / *Journal of Ecological and Environmental History* 10: 21-40 (2023) ▼ ハンの巡行: ジョチ・ウルスにおける〈移動〉のポリティクス『スラヴ研究』70: 105-134 (2023) ▼ Marāgha Ceased to Function: The Ṭūsī Family's Intellectual Network and Īl-Khānīd Political Itinerance, *Crossroads: An Interdisciplinary Journal of Asian Interactions* 22: 1-24 (2023) ▼ 「一四世紀の危機」の語り方: ヨーロッパ到来以前の黒死病『思想』1200: 9-32 (2024) ㊦ 2 その他業績（論文形式）(1) 総説・解説・評論等 ▼ モンゴル帝国時代の天文学 (弘末雅士, 荒川正晴責任編集; 宇野伸浩, 四日市康博編集協力『モンゴル帝国と海域世界: 12 ~ 14 世紀』(岩波講座 世界歴史 10) 209-210, 岩波書店, 2023) ▼ 特集にあたって: 空白, 辺境, そして地下から『思想』1200: 6-8 (2024) (3) 書評 ▼ パトリック・カール・オブライエン『「大分岐論争」とは何か: 中国とヨーロッパの比較』(ミネルヴァ書房, 2023)『図書新聞』3632 (2024) (5) その他 ▼ ウルグ・ベク: 天文君主の虚像と実像 (小松久男編者代表『中央ユーラシア文化事典』182-183, 丸善出版, 2023) ▼ 「14 世紀の危機」の語り方: 2023 年度夏期国際シンポジウム <<崩壊の局面: アフロ・ユーラシアから「14 世紀の危機」を思考する>> 報告記『スラブ・ユーラシア研究センターニュース』169: 1-5 (2023) ▼ Report on 2023 Summer International Symposium: "The Phase of Catastrophe? The Crisis of the 14th Century in Afro-Eurasian Context," *Slavic-Eurasian Research Center News* 28: 1-4 (2024) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ Did the Climate Change Shake the Empire? In the Case of the Mongols in 1270's and 80's, 2023 Spring Conference of the Society of Ecological and Environmental History "Environment and Diseases," Online (2023.4.22) ▼ "Converting" Knowledge, Culture

and Themselves: Mongols' Imperial Rule in 13th- and 14th-Century Eurasia, International Workshop “Nexus of Knowledge: Science, Medicine, and Technology on the Silk Roads,” University of California, Berkeley (2023.4.28) ▼ A Strange Parallel? Agrarian Crisis with Economic Efflorescence in 14th-Century Mongol Eurasia, International Conference “Great Chinggisid Crisis: History, Context, Aftermath,” University of Bonn (2023.5.12) ▼ 知識, 文化, そして自らを〈換算〉する: モンゴル帝国のユーラシア統治, 高等研究所セミナーシリーズ「ポスト・コロナ時代のグローバル・ヒストリー研究」公開講演会, 早稲田大学 (2023.5.27) ▼ (with Takeshi Nakatsuka) Snowfall in Baghdad: The Mongol Empire on the Threshold of the Little Ice Age, Slavic-Eurasian Research Center 2023 Summer International Symposium “The Phase of Catastrophe: The Crisis of the 14th Century in Afro-Eurasian Context,” Hokkaido University (2023.7.13) ▼ Islamicate Reading of the Chinese Calendar: Qutb al-Dīn al-Shīrāzī's (1236–1311) Note on a Topkapı Fragment (Ahmet III 3455), The 16th International Conference on the History of Science in East Asia, Panel 35 “Astral Sciences in Context of Cultural Encounters,” Goethe-Universität Frankfurt am Main (2023.8.22) ▼ Along the River or between the Two Seas: The Imperial Itinerance of the Golden Horde, International Symposium “Water Networks, Islands, and Political Powers in the Global Middle Ages,” Rikkyo University (2023.10.8) ▼ 14 世紀の危機の語り方: ヨーロッパ到来以前の黒死病, 国立大学附置研究所・センター会議 第3 部会 (人文・社会科学系) シンポジウム「危機の世紀」, 北海道大学 (2023.10.13) ▼ Beyond Commensurability: Chinese Calendar in Islamicate Astronomical Handbook in the Period of the Mongol Empire (1206–1368), International Conference “Transmission, Translocation, and Transcreation: A Cultural Kinematics of Astral Knowledge,” on the Gerda Henkel Stiftung funded research project “Changing Episteme in Early Modern Sanskrit Astronomy,” University of Copenhagen (2023.11.14) ▼ The “Imperial Itinerance” of the Golden Horde, International Conference “The Golden Horde: Art, Material Culture, and Architecture” funded by the Fritz Thyssen Foundation, Max Planck Institute for the History of Science, Berlin (2023.12.8)

井上岳彦 ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼ カルムイク人 (小松久男編集代表; 梅村坦, 坂井弘紀, 林俊雄, 前田弘毅, 松田孝一編『中央ユーラシア文化事典』588–589, 丸善出版, 2023) ▼ ロシア帝国仏教の偽史言説のかなた: 「兄弟」としてのミハイル・ロマノフとヌルハチ (『鴨東通信』117, 16–17, 思文閣出版, 2023) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ Ecological Adaptation of the Kalmyks in the Nineteenth Century, International Symposium “Muddying the Waters: Towards a History of the Caspian Sea,” Austrian Academy of Sciences (2023.9.14) ▼ ハンボラマ・イロルトウエフと外務省: アジア巡礼旅行 (1900 年–1901 年) をめぐって, ロシア史研究会 2023 年度大会, 九州大学 (2023.10.28) ▼ 環境変動下におけるカルムイク文化生態史: サカナ・ハタリス・ゼムリャンカ, ロシア東欧学会 2023 年度研究大会, 京都大学 (2023.11.4) ▼ Oral History of an Asian/European Girl in Munich DP Camp, Hokkaido-Melbourne University Joint Seminar “Eurasian Migration Past, Present and Future,” SRC (2024.1.12)

岩下明裕 ㊦ 1 学術論文 ▼ “Making Border Studies Together: From Japan to the World,” *Eurasia Border Review* 13: 15–30 (2023) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論

等 ▼（北海道新聞根室支局・稚内支局他と）ウクライナ戦争に関するアンケート調査結果報告書 2023年度版『境界研究』別冊：1-30（2023）（5）その他 ▼はしがき（井竿富雄『知られざる境界地域 やまぐち』2-5, 北海道大学出版会, 2023） ▼論壇『熊本日日新聞』（月1回連載 2023.4-2024.3） ⅴ5 学会報告・学術講演 ▼The Changing World after Russia's Invasion in Ukraine: As seen in Border Studies & Geo-Politics, The International Geographical Union (IGU) Thematic Conference on: Islands in Relations: Conflicts, Sustainability, and Peace, Osaka (2023.4.5) ▼ Book Talks: Geo-politics in Northeast Asia (Routledge, 2022), Association for Borderlands Studies, Annual Convention, Tempe (2023.4.14) ▼ Panel Discussion “Where Does State Sovereignty End?” MCC Budapest Peace Form, Budapest (2023.6.7) ▼ Japan's Geo-politics under the Russia's War in Ukraine, SRC Winter Symposium, Sapporo (2023. 12.7) ▼ Round Table “European-Japanese Cooperation Facing the Crises in Eurasia,” Ludwig-Maximilians-Universität, München (2024. 1.26)

宇山智彦 ⅴ1 学術論文 ▼多方面外交を維持・拡大する中央アジア：分断ではなく競存を求める中小国『国際問題』714: 48-58 (2023) ▼中央アジア諸国 ナザルバエフ, カリモフ, ニヤゾフ: 「建国の父」の威光はなぜ失われるのか（根本敬, 粕谷祐子編著『アジアの独裁と「建国の父」: 英雄像の形成とゆらぎ』207-239, 彩流社, 2024） ⅴ2 その他業績（論文形式）（1）総説・解説・評論等 ▼《総説》カザフスタンという国, Web マガジン『アジア・マップ』vol. 1, 立命館大学アジア・日本研究所 (2023.9.5) https://www.ritsumei.ac.jp/research/aji/asia_map_vol01/kazakhstan/country/ ▼解説 岡奈津子さんと『〈賄賂〉のある暮らし』のこと（岡奈津子『新版 〈賄賂〉のある暮らし: 市場経済化後のカザフスタン』245-252, 白水社, 2024）（5）その他 ▼ロシアと中央ユーラシア; ソ連と中央ユーラシア; ワリハノフ: 夭折したカザフ知識人の多面的業績; ボケイハノフとバイトウルスノフ: カザフ人の改革運動とアラシュ・オルダ自治政府; グルム=グルジマイロ; ポターニン（小松久男編集代表『中央ユーラシア文化事典』102-105, 114-117, 188-189, 200-201, 642-643, 644-645, 丸善出版, 2023） ▼（インタビュー）中央アジア, 外交転換期〔視点 ウクライナ危機〕『読売新聞』（2023.11.24） ▼（2022年度ロシア史研究会大会概要）共通論題A「ロシアとウクライナ」『ロシア史研究』111: 100-101（2023） ⅴ5 学会報告・学術講演 ▼権威主義体制下の世論の自立性を左右するものは何か: ロシアとカザフスタンの比較, 日本比較政治学会 2023年度大会, 山梨大学 (2023.6.17) ▼中央アジアをめぐる国際関係: 地殻変動の中での「通常運転」, ソビエト史研究会 2023年度年次研究大会パネル「ロシア=ウクライナ戦争とユーラシア諸国」, 専修大学サテライトキャンパス (2023.7.8) ▼中央アジアでの中国の影響力は強まっているのか: 中央アジア諸国の「本音」の読み方, 中曽根平和研究所公開ウェビナー「ウクライナ戦争の波及効果: 中央アジアと中国の接近」, オンライン (2023.7.10) ▼カザフスタンの対ロ世論の激変と多ベクトル外交の活発化, 第16回カザフスタン研究会, JICA 地球ひろば (2023.7.15) ▼中央アジアの地域的特徴と経済発展の可能性, 経済産業省北海道経済産業局中央アジア物流セミナー, 北海道経済産業局 (2023.9.27) ▼現地調査報告: 南コーカサス3国から見る大国・小国関係のもつれ, 日本国際フォーラム「中露の勢力圏構想の行方と日本の対応」研究会, オンライン (2023.11.8) ▼「ポストソヴィエト」と「グローバルサウス」の狭間の中央アジア: 地理的概念の政治的機能, 日本国際政

治学会 2023 年度研究大会, 福岡国際会議場 (2023.11.12) ▼ Prospects for Creating a Free and Open Eurasia: Is It a Utopia?, Public discussion “Free and Open Indo-Pacific: Japanese Views on the Security and Peace in the Region,” Rondeli Foundation, online (2023.11.20) ▼ Multiple Imaginations of National Space: Ideas of Kazakh Statehood of the Alash Orda and Their Relations with Turkistan, International Scientific Conference “Jadids: Ideas of National Identity, Independence and Statehood,” Congress Hall Tashkent City (2023.12.11) ▼ロシアにとって勢力圏とは何か: ウクライナと中央アジアの視点から, 日本国際フォーラム公開シンポジウム「中露の勢力圏構想の現状と揺らぐ国際秩序: 『中央アジア・コーカサス・大洋州・グローバルサウス』から考える」, オンライン (2024.2.21) ▼旧ソ連地域の脱植民地化とは何か: その国際的・国内的複雑性, 中曽根平和研究所公開シンポジウム「ウクライナ侵攻から 2 年のロシア・旧ソ連地域」, 国際文化会館 (2024.2.22)

ウルフ・ディビッド (David Wolff) ㊦ 1 学術論文 ▼ Vladivostok and Inturist: Refugee Flows to the North Pacific, 1940–1941 (Beuerle et al., eds., *Russia's North Pacific: Centres and Peripheries*, 91–110, Heidelberg: Heidelberg UP, 2023) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ A Swing of the Pendulum: East and West and the Russian Far East in Modern Russian History, Lehrstuhl für Russland-Asiens Studium, LMU-München (2023.7.20) ▼ Sugihara Chiune and the Soviet Union: New Documents, New Perspectives, Davis Center for Russian and Eurasian Studies, Harvard University (2023.11.15) ▼ Trans-Siberian Transit to Anywhere: One Step Ahead of the Holocaust in 1940–1941, 55th Annual Convention of Association for Slavic, East European and Eurasian Studies (ASEEES), Philadelphia (2023.12.2)

黒木英充 ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼アレppoの長い 19 世紀: 宗派紛争をめぐる多層構造的な理解 (2023 年度大会近代史部会) 『歴史学研究』1041 (2023 年増刊号): 70–80 (2023) ㊦ 3 著書 ▼ (編著) 『移民・難民のコネクティビティ』(シリーズ イスラームからつなぐ 2) 291 (東京大学出版会, 2024)

仙石学 ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ポーランドからみたウクライナ: 複雑な両国の関係 『修親』771: 6–9 (2023) ▼第 30 章 ポーランド; 第 57 章 ポーランドの「東方政策」の変容: EU との協働から「大西洋指向」へ (広瀬佳一編著 『NATO (北大西洋条約機構) を知るための 71 章 (第 2 刷, 一部改訂)』158–161, 279–282, 明石書店, 2023)

兎内勇津流 ㊦ 1 学術論文 ▼沿海州ゼムストヴォ参事会臨時政府 (一九二〇年) 試論: シベリア出兵ともう一つの緩衝 『ロシア史研究』110: 51–76 (2023) ▼荒木貞夫とシベリア出兵 (瀧下彩子、矢野真太郎編 『軍人荒木貞夫と戦前の日中関係: 東洋文庫所蔵の口述記録』9–21 (2024)) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼パネル A 「シベリア出兵: その内外への波及」 『ロシア史研究』110: 108–110 (2023) ▼シベリア出兵を見直す 『ロシア史研究』111: 104–108 (2023) (2) 研究ノート等 ▼ (及川琢英と共著) 立花小一郎回顧余録 (六) 大正 10 年 4–6 月 (翻刻) 『近現代東北アジア地域史研究会

Newsletter』35: 47-82 (2023) (5) その他 ▼「日本帝国の膨張と縮小」を刊行：大正期の北サハリン占領に光『北海道新聞』(2023.7.11) ㊦5 学会報告・学術講演 ▼(竹野学, 池田裕子, 浅野豊美, エドワルド・パールィシェフ, 神長英輔, 井竿富雄, 中山大将と) 書評：原暉之他編『日本帝国の膨張と縮小：シベリア出兵とサハリン・樺太』に対するリプライ, 日露関係史研究会第34回例会, 北海道大学東京オフィス (2023.9.3) ▼(竹野学, 池田裕子, 浅野豊美, 三木理史, 中山大将と) 書評：原暉之他編『日本帝国の膨張と縮小：シベリア出兵とサハリン・樺太』に対するリプライ, 第67回サハリン樺太史研究会, 北海道大学 (2023.9.16) ▼書評：長興進『チェコスロヴァキア軍団と日本 1918-1920』(教育評論社 2023年3月刊), 早稲田大学東欧研究所研究会, オンライン (2023.9.30) ▼(竹野学, 池田裕子, 倉田有佳とリプライ) 書評会：原暉之・兎内勇津流・竹野学・池田裕子編著『日本帝国の膨張と縮小：シベリア出兵とサハリン・樺太』, 立教大学 (2023.11.11) ▼アナトーリー・ペペリヤーエフ (1891-1938) をめぐって その1, 第18回シベリア出兵史研究会, 筑波大学 (2024.3.10)

高橋沙奈美 ㊦1 学術論文 ▼神政学の台頭? : ウクライナ侵攻と正教会というアクター『宗教哲学研究』41: 1-17 (2024) ㊦3 著書 ▼『迷えるウクライナ：宗教をめぐるロシアとのもう一つの戦い』287 (扶桑社新書, 2023) ▼ロシア正教 (油本真理, 溝口修平編『現代ロシア政治』156-157, 法律文化社, 2023) ㊦4 その他業績 (著書形式) ▼ウクライナの正教会と分裂の歴史 (黛秋津編『講義ウクライナの歴史』226-248, 山川出版社, 2023) ▼(飯嶋秀治と共編)『人間共生論叢 川辺川のほとりで：福岡・人吉の正教会調査』152 (九州大学文学部比較宗教学研究室, 2024) ㊦5 学会報告・学術講演 ▼黒衣のコラボレーター? ウクライナにおける戦争と2つの正教会, 「宗教と社会」学会第31回学術大会, 愛知学院大学 (2023.6.24-25) ▼ウクライナ・ディアスポラ教会：異論派の時代の自己認識, ロシア史研究会大会, 九州大学 (2023.10.21-22) ▼ウクライナ避難民と正教会, ロシア東欧学会 2023年度研究大会, 京都大学 (2023.11.4-5)

長縄宣博 ㊦2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼Soviet Muslims at the Congress of the Muslim World in Mecca (1926) (Eileen Kane, Masha Kirasirova, Margaret Litvin, eds., *Russian-Arab Worlds: A Documentary History*, 150-160, New York: Oxford University Press, 2023) ▼Khakimov Karim Abdraufovich (*Islam v Bashkortostate: Entsiklopedicheskii slovar'*, 160-161, Moscow: Medina, 2023) ▼長い20世紀の終焉『思想』1200: 61-85 (2024) (5) その他 ▼クリミア・タタール人, 日露戦争 (小松久男編集代表『中央ユーラシア文化事典』590-591, 676-679 丸善出版, 2023) ㊦5 学会報告・学術講演 ▼長い20世紀のロシアと中東, 第45回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会 (2023.6.16) ▼Sunni-Shiite Sectarianism in Astrakhan? A View from Tatar and Azerbaijani Newspapers, The Archives of Islam in the Russian Empire (16th-early 20th Centuries), Commission for the Study of Islam in Central Eurasia, Austrian Academy of Sciences (2023.6.28) ▼Shiite Astrakhan in Radical Connectivity at the Beginning of the Twentieth Century, Muddying the Waters: Towards a History of the Caspian Sea, Austrian Academy of Sciences (2023.9.14) ▼長い20世紀の終焉, 国立大学附置研究所・センター会議 第3部会 (人文・社会科学系) シンポジウム「危機の世紀」(2023.10.3)

▼ Rhizomes of Insurgents, Forests of Nation-States: Russia and the Middle East in the Aftermath of Empires, SSEES-SRC Workshop, Ends of Empires: Crisis and Resilience in the Long Twentieth Century, University College London (2023.12.11) ▼ General Discussions, Tatar Diaspora in Modern Eurasia: Connection, Transformation, Revolution, The Toyo Bunko (Oriental Library) (2023.12.17) ▼ O romane Sh. Usmanova Legion yul'i, Turghay dalalarında, Obshchestvennoe i kul'turnoe nasledie Sh. Usmanova: K 125-letiiu so dnia rozhdeniia, Institut istorii im. Sh. Mardzhani AN RT, online (2023.12.18)

野町素己 ㊦ 1 学術論文 ▼ (with Tomasz Kamusella) Introduction; (with Aleksandra Salamurović) Script Revitalization? Reemergence of Old Scripts among South Slavs (Motoki Nomachi and Tomasz Kamusella, eds., *Languages and Nationalism Instead of Empires* [Routledge Histories of Central and Eastern Europe], 1–9, 140–166, London: Routledge, 2023) ▼ The Early Nikita Il'ich Tolstoj as a Macedonist (Svetlana Mixajnovna Tolstaja, ed., *Slovo i čelovek akademika Nikity Il'icha Tolstogo*, 258–274, Moscow: Indrik, 2023) ▼ Nikita Il'ich Tolstoj kako Makedonist, *Prilozi*, XLVIII (1–2): 141–166 (2023) ㊦ 3 著書 ▼ (with Tomasz Kamusella) *Languages and Nationalism Instead of Empires* (Routledge Histories of Central and Eastern Europe), 284 (London: Routledge 2023) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ (Keynote Speech) A foiled Soviet Contribution to Macedonian Linguistics (1948–1950), 2nd International Ohio State – Ca' Foscari Joint Workshop on South Slavic and Balkan languages, Columbus (2023.4.22) ▼ (Memorial Lecture) Avram Mrazović's Linguistic Thought and the Question of Polyvalency in Church Slavonic, 25th Kenneth E. Naylor Memorial Lecturer in South Slavic Linguistics, Dept. of Slavic and East European Languages and Cultures at the Ohio State University, Columbus (2023.4.24) ▼ (Keynote Speech) Zdzisław Stieber and His Contribution to Kashubian Studies, Spuścizna Zdzisława Stiebers w obecnym i nowych tendencji w językoznawstwie slawistycznym Sesja w 120. rocznicę urodzin Zdzisława Stiebers, Warsaw (2023.6.6) ▼ Issledovanija po makedonskomu jazyku akad. N. I. Tolstogo, Tolstovskie čtenija. K stoletiju so dnja roždenija akad. N. I. Tolstogo, Jasnaja Poljana (online) (2023.6.8)

乗松亨平 ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ カフカの耳鳴り: 書くこと, 住むこと, 聞こえること 『現代思想』 51 (17): 78–88 (2023) (3) 書評 ▼ 木澤佐登志 『闇の精神史』 (早川書房, 2023) 『Hayakawa Books & Magazines (β)』 (2024.1.31) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ Two Faces of Infinity in the Russian Cosmists' Idea of Solar Energy, The 14th Shanghai Biennale, Power Station of Art (2024.1.14)

服部倫卓 ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ プーチンとルカシェンコ 腐れ縁でも核兵器については…… 『Wedge ONLINE』 (2023.4.18) ▼ 公式統計とミラーデータで見る 2022 年ロシアの貿易 『ロシア NIS 調査月報』 5: 26–43 (2023) ▼ あのポーランドがなぜ? ウクライナ産農産物拒絶の裏側 『Wedge ONLINE』 (2023.5.14) ▼ 制裁下のベラルーシにおける基幹産業の動向 『ロシア NIS 調査月報』 6: 30–37 (2023) ▼ 独裁を守るためロシアに従属するベラルーシ 『外交』 79: 68–73 (2023) ▼ (ロシア経済) エネルギー高騰追い風も中長期的には成長鈍化へ 『週刊エコノミスト』 (2023.6.20) ▼ ロシ

ア・ウクライナ農業に痛手のダム決壊で砂漠化進む? 『Wedge ONLINE』 (2023.6.15) ▼
ルカシェンコがプーチン・プリゴジンと織り成す奇妙な三角関係 『Foresight』 (2023.7.6)
▼制裁下で変容するロシアの食料安全保障 『ロシア NIS 調査月報』 8: 68-75 (2023) ▼ロ
シアの愚行でとばっちり 大回り強いられる「中欧班列」 『Wedge』 8: 64-66 (2023) ▼
ワグネルで息を吹き返すベラルーシ 次なる触手は 『Wedge ONLINE』 (2023.8.2) ▼「プ
リゴジンの乱」後のワグネル: ベラルーシが安住の地に? 『世界』 9: 10-14 (2023) ▼ロ
シア穀物輸出が好調? 黒海合意と戦乱下の実態 『Wedge ONLINE』 (2023.8.21) ▼ロシ
ア産魚介類輸入に見る日米の相違: 鍵を握るアラスカの利害 『ロシア NIS 調査月報』 11:
64-69 (2023) ▼北大で発見 幻の(?) ロシア貿易統計集を読んでわかること 『Wedge
ONLINE』 (2023.11.14) ▼プーチン戦争でロシア対外経済発展計画は台無し 『ロシア NIS
調査月報』 12: 64-69 (2023) ▼「軍事ケインズ主義」を進めるプーチン 2024年のロシア
経済 『Wedge ONLINE』 (2024.1.5) ▼ロシア金融市場を脅かす住宅ローンの官製バブル 『ロ
シア NIS 調査月報』 2: 88-91 (2024) ▼プーチンの戦争を支える異形のロシア経済 『月刊正論』
3: 80-87 (2024) ▼プラス成長に転じた「ロシア」今後数年間の国力は盤石 『リベラルタ
イム』 3: 22-23 (2024) ▼軍事ケインズ主義はロシア経済を救うか 『国際問題』 2: 16-25
(2024) ▼ロシアの軍需産業は覚醒したのか: 戦車と無人航空機を中心に 『ロシア NIS 調査
月報』 3: 38-47 (2024) (5) その他 ▼ロシア・ウクライナ・ベラルーシ・モルドバ (一
般社団法人中国研究所編 『中国年鑑』 125-127, 明石書店, 2023) ▼(インタビュー) ど
う見る? 「欧州最後の独裁者」の健康不安説 気になるロシアの動き 『朝日新聞』 (2023.5.18)
▼(インタビュー) 輸出協定を「人質」に揺さぶりかけるロシア 強気の背景を読み解くと
『朝日新聞』 (2023.7.19) ❶ 4 その他業績 (著書形式) ▼(教材の監修と執筆) 『図説
地理資料 世界の諸地域 NOW 2024』 帝国書院 (2024) ▼(教材の監修と執筆) 『新詳地理
資料 COMPLETE 2024』 帝国書院 (2024) ❶ 5 学会報告・学術講演 ▼ロシア・ウクライ
ナの穀物・肥料輸出の地経学, 比較経済体制学会第 63 回全国大会, 神奈川大学 (2023.6.4)
▼Japan's Approach to Sanctions against Russia, 55th Annual Convention of Association for Slavic,
East European and Eurasian Studies (ASEEES), Philadelphia (2023.12.3)

藤本健太郎 ❶ 5 学会報告・学術講演 ▼ソ連の初期極東外交戦略: 満州事変で変わった
こと, 変わらなかったこと, 北海道スラブ研究会, 北海道大学 (2023.6.8) ▼北満鉄道讓
渡協定 (1935) と 1930 年代ソ連の東アジア戦略, 東アジア近代史学会研究大会, 東京大学
(2023.7.2) ▼日ソ不可侵条約が結べない: 1920 年代ソ連の極東安全保障, JIIA-SRC 共催
シンポジウム 戦間期国際秩序の形成とその変容: 地域間比較と日本, TKP ガーデンシティ
PREMIUM 札幌大通 (2024.1.20)

ベクトウルスノフ・ミルラン (Mirlan Bektursunov) ❶ 2 その他業績 (論文形式) (3) 書
評 ▼Akiyama Tetsu, *The Qırghız Baatır and the Russian Empire: A Portrait of a Local Intermediary in Russian Central Asia* (Leiden: Brill, 2021) 『内陸アジア史研究』 38: 41-49 (2023) ❶ 5 学会報告・学術講演 ▼家庭か, 環境か, アニメか? 日本で子育てしながら母語と日本語での教育について思うこと, 第 7 回キルギス日本学・日本語教育国際研究大会, ビシケク国立大学, オンライン, (2023.8.20) ▼“Legal Pluralism” in the Soviet Central Asian Con-

text? The Soviet Regime, Kyrgyz Manaps, and the Local elections in the Kyrgyz Countryside in the 1920s, Central Eurasian Studies Society Annual Conference 2023, The University of Pittsburgh, online, (2023.10.21) ▼ブカラ部族の台頭? 1920年代後半のクルグズスタンにおける村ソヴィエト選挙の考察, ロシア史研究会 2023 年度大会, オンライン (2023.10.28) ▼The Russia-Ukrainian War: Has the War Changed Something in Russian and Central Asian Asymmetrical Relations? The 26th Hokkaido University and Seoul University Joint Symposium “Towards Sustainable Development of Slavic-Eurasian Studies in Northeast Asia During Crises,” SRC, (2023.10.31) ▼「ソ連と中央アジア」シリーズ: その 1, 中央アジアの社会主義体験は何であったのか? 日本ユーラシア協会, 日本ユーラシア協会札幌支部文化講演会 (2023.11.21) ▼「ソ連と中央アジア」シリーズ: その 2, ソ連崩壊後の中央アジア: グローバル世界における国民国家の建設過程, 日本ユーラシア協会, 日本ユーラシア協会札幌支部文化講演会 (2024.3.12) ▼ Seeing the Soviets Through Lineage, International Workshop “Ongoing and Future Approaches to Central Asian Studies,” Staffordshire University, Viadrina Center of Polish and Ukrainian Studies, Europa-Universität Viadrina Frankfurt (Oder), online (2024.3.12)

松井康浩 ㊦1 学術論文 ▼ソ連の異論派と西側市民の協働: ゆらぐ冷戦構造下の越境的ネットワーク(木畑洋一, 中野聡編『岩波講座 世界歴史 23: 冷戦と脱植民地化 II 20 世紀後半』151-170, 岩波書店, 2023)

村上智見 ㊦2 その他業績(論文形式)(1) 総説・解説・評論等 (5) その他 ▼シルクロードの織物(小松久男編集代表『中央ユーラシア文化事典』30-31, 丸善出版, 2023) ▼(要旨集)(渡邊陽子, ベグマトフ・アリシェル, ベルディムロドフ・アムリディン, ボゴモロフ・ゲンナディー, サンディボエフ・アリシェル, 寺村裕史, 宇野隆夫と共著) 中央アジア ソグディアナの植物利用: カフィル・カラ遺跡シタデル出土炭化木材の調査から『日本文化財科学会第 40 回記念大会要旨集』146-147 (2023) ▼(要旨集) Textile Culture of the Early Iron Age in Central Asia Based on Investigations of Textile Impressions on Pottery Excavated from the Kok-Tepa Site in Uzbekistan (中央アジア初期鉄器時代の織物文化: ウズベキスタンのコク・テパ遺跡出土土器布圧痕の調査から)『2023 東アジア文化遺産保存国際シンポジウム in 札幌 II』559-562 (2023) ▼(ベグマトフ・アリシェル, サンディボエフ・アリシェル, マハマディエフ・ガイラット, アリモフ・ナヴルズ, ベルディムロドフ・アムリディン, 寺村裕史, 宇野隆夫, 末森薫, 押鐘浩之と共著) ソグディアナの都市を探る: ウズベキスタン共和国クルドル・テパ遺跡発掘調査(2023 年度)『第 31 回西アジア遺跡調査報告会報告集』112-116 (2024) ▼(ベグマトフ・アリシェル, サンディボエフ・アリシェル, マハマディエフ・ガイラット, アリモフ・ナヴルズ, 寺村裕史, 宇野隆夫と共著) ソグディアナの都市を探る: ウズベキスタン共和国クルゴン・テパ遺跡発掘調査(2023 年度)『第 31 回西アジア遺跡調査報告会報告集』150-154 (2024) ▼(寺村裕史, 宇野隆夫, ベグマトフ・アリシェル, ベルディムロドフ・アムリディン, ボゴモロフ・ゲンナディー, サンディボエフ・アリシェル, 末森薫, 押鐘浩之と共著) ソグド王離宮を掘る: ウズベキスタン共和国カフィル・カラ遺跡(シャフリスタン地区) 2023 年度発掘調査『第 31 回西アジア遺跡調査報告会報告集』117-121 (2024) ㊦5 学会報告・学術講演 ▼モンゴル唐様式墓出土染織品の特質: 僕固

乙突墓とオラーン・ヘレム壁画, Preservation of museum collection at the storage - Packing and Box project 講演, ザナバザル美術館 (2023.4.26) ▼シルクロードが繋いだ中央ユーラシアと日本, 日本ユーラシア協会札幌支部講演会, 北海学園大学 (2023.8.19) ▼Textile Culture of the Early Iron Age in Central Asia Based on Investigations of Textile Impressions on Pottery Excavated from the Kok-Tepa Site in Uzbekistan (中央アジア初期鉄器時代の織物文化: ウズベキスタンのコク・テパ遺跡出土土器布圧痕の調査から), 2023 東アジア文化遺産保存国際シンポジウム in 札幌, 北海道大学学術交流会館 (2023.8.11) ▼発掘調査によるシルクロード研究の最前線: ユーラシアの文化交流とソグド人, 日本ロシア・東欧研究連絡協議会 (JCREES) スラブ・ユーラシア研究サマースクール, SRC (2023.8.24) ▼中央アジア ソグディアナの植物利用: カフィル・カラ遺跡シタデル出土炭化木材の調査から, 日本文化財科学会第 40 回記念大会, 奈良県立なら歴史芸術文化村 (2023.10.22) ▼発掘調査で探るシルクロードの都市と文化, 第 48 回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会, SRC (2024.3.1) ▼シルクロードの染織品, 月いち! オリ博オンライン講座, 古代オリエント博物館 (2024.3.20) ▼ソグディアナの都市を探る: ウズベキスタン共和国クルドル・テパ遺跡発掘調査 (2023 年度), 第 31 回西アジア発掘調査報告会, 帝京大学文化財研究所 (2024.3.24) ▼ソグディアナの都市を探る: ウズベキスタン共和国クルゴン・テパ遺跡発掘調査 (2023 年度), 第 31 回西アジア発掘調査報告会, 帝京大学文化財研究所 (2024.3.24)

村上勇介 ❶ 1 学術論文 ▼国際人権レジームと先住民: ペルーの事例 (宇佐見耕一編『ラテンアメリカと国際人権レジーム: 先住民・移民・女性・高齢者の人権はいかに守られるのか?』(同志社大学人文科学研究所研究叢書 LXIII) 87-105, 晃洋書房, 2024) ▼現代ペルー政治の今日的位相; 現代ペルーの政治社会構造: 変化と不変; 21 世紀のペルー政治: 脆弱な政党, 小党分裂化, アウトサイダーの再登場と混迷 (村上勇介編『現代ペルーの政治危機: 揺れる民主主義と構造問題』(アジア環太平洋研究叢書 7) 13-48, 49-88, 89-121, 国際書院, 2024) ❷ 2 その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼センデロ・ルミノソによる暴力とペルーアンデス高地の農村社会 (『ペルー映画祭 vol. 2 公式パンフレット』16-17, ブエナワイカ, 2023) ❸ 3 著書 ▼El Perú en la era del Chino: la política no institucionalizada y el pueblo en busca de un Salvador (4ª Edición) [Ideología y política 27, tomo 1], 522 (Lima: Instituto de Estudios Peruanos, 2023) ▼El Perú en la era del Chino: la política no institucionalizada y el pueblo en busca de un Salvador (4ª Edición) [Ideología y política 27, tomo 2], 341 (Lima: Instituto de Estudios Peruanos, 2023) ▼『現代ペルーの政治危機: 揺れる民主主義と構造問題』(アジア環太平洋研究叢書 7), 229 (国際書院, 2024) ❹ 5 学会報告・学術講演 ▼「制度化しない政治」の現在: 小党分裂化と分極化の進行, 日本ラテンアメリカ学会第 44 回定期大会パネル C 「ペルーの政治危機とその構造的背景」, 明治大学 (2023.6.3) ▼嵐の前の静けさ?: 反政府抗議活動の自然消滅とペルー・ボルアルテ政権の今後, 京都大学アジア環太平洋セミナー, 京都大学 (2023.6.24) ▼日本とペルーの外交関係, 日本ペルー修好 150 年記念シンポジウム「太平洋をつなぐ過去と未来」, 上智大学 (2023.12.2)

みせらねあ

センターの役割分担

2024年度のセンター教員の役割分担は以下の通りです。[長縄・編集部]

センター長	長縄
副センター長	仙石・ウルフ
拠点運営委員会委員	岩下・宇山・青島・ 長縄・野町
【学内委員会等】	
教育研究評議会、部局長等連絡会議、部局長等意見交換会	長縄
教務委員会	長縄
創成研究機構運営委員会	長縄
図書館委員会	青島
国際担当教員	ウルフ
NJE3 学内運営委員会およびカリキュラム検討専門委員会	安達・仙石
低温科学研究所拠点運営委員会	長縄
北極域研究センター運営委員会	服部
社会科学実験研究センター運営委員会	服部
サステナブルキャンパス推進員	野町
ダイバーシティ・インクルージョン推進員	宇山
ハラスメント予防推進員	岩下
広報担当者	宇山
共同利用・共同研究拠点アライアンス運営委員	長縄
アイヌ・先住民研究センター運営委員	青島
情報公開・個人情報保護審査委員会委員	仙石
【学外委員会等】	
国立大学附置研究所・センター会議	長縄
国立大学共同利用・共同研究拠点協議会	長縄
JCREES 事務局	長縄・ヤスミナ（諫早）
JCREES サマースクール	野町
地域研究コンソーシアム理事	長縄
地域研究コンソーシアム運営委員	仙石・諫早
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所拠点運営委員	岩下
ICCEES 情報	青島
【センター内部の分担】	
大学院講座主任	仙石
教務委員	岩下
入試委員	宇山
総合特別演習担当	（前期）安達 （後期）仙石
全学教育科目責任者	岩下
全学教育科目総合講義	岩下
全学教育科目演習	服部
文学部授業	青島
国際科目	ウルフ

将来構想	長縄・宇山・仙石・野町・青島
点検評価	長縄・宇山・岩下・田宮
夏期シンポジウム (実施方法など検討)	青島・諫早・ヤスミナ・EES 助教・EES 非常勤研究員・非常勤研究員
10月ブリエート国際会議	長縄・村上・ヤスミナ・EES 助教・EES 非常勤研究員・非常勤研究員
冬期シンポジウム	野町・安達・ヤスミナ・非常勤研究員 (EES 助教・EES 非常勤研究員)
EES 全体会議	岩下・EES 助教・EES 非常勤研究員 (ヤスミナ・非常勤研究員)
図書情報	兎内・野町
広報	宇山
予算	服部・田宮
共同利用・共同研究公募	服部
客員教員	仙石
山脇 大	服部
塩谷 哲史	岩下
Andrey Kazantsev	岩下・青島
Diana Kubaibergen	宇山
外国人研究員プログラム	安達・ウルフ・田宮
Olena Nikolayenko	服部
Roman Katsman	安達
Vytautas Kuokštis	仙石
Vladimir Rouvinski	岩下
Siarhei Bohdan	長縄
Renat Bekkin	長縄
非常勤研究員	野町
中村・鈴川基金	仙石
百瀬基金	岩下
公開講座	諫早 (・村上)・田宮
公開講演会	野町・ヤスミナ
専任研究員セミナー (助教・非常勤研究員セミナーを含む)	安達
その他研究会・講演会	安達・ヤスミナ・非常勤研究員・田宮
クロスアポイントメント教員 (人事対応)	岩下
共共拠点三研究所・センター交流 (東南アジア研・AA 研)	岩下・宇山
ウクライナ研究ユニット	青島
生存戦略研究ユニット	長縄・岩下・村上
研究所一般公開	ヤスミナ・村上
博物館展示	野町
NIHU 東ユーラシア (NIHU セミナー、HP、オンライン報告書)	岩下
UBRJ (HP、『境界研究』)	岩下
その他諸行事企画	ヤスミナ・非常勤研究員
雑誌編集委員会	安達・諫早・ウルフ・仙石・青島
<i>Acta Slavica Iaponica</i>	諫早・安達・ウルフ・田宮
『スラヴ研究』	青島・田宮
スラブ・ユーラシア叢書, SES, 研究報告集	安達

ニューズレター和文 (メルマガ・HP コンテンツ)	宇山・田宮 (・長縄)
ニューズレター欧文 (メルマガ・HP コンテンツ)	ウルフ・田宮 (・長縄)

専任研究員消息

ウルフ・ディビット研究員は、11/13-12/5の間、“55th ASEEEES Annual Convention” 出席及び研究報告、資料収集のため、ケンブリッジ、ニューヨーク、フィラデルフィア（アメリカ）に出張。また1/22-2/10の間、資料収集のため、ミュンヘン（ドイツ）、ニューヨーク（アメリカ）に出張。

野町素己研究員は、11/18-11/29の間、講演会及び資料収集のため、ポズナニ、ワルシャワ、オストラ・ウエンカ（ポーランド）に出張。また、2/17-2/27の間、資料収集のため、スコピエ（北マケドニア）、ベオグラード（セルビア）に出張。

岩下明裕研究員は、11/20-11/26の間、メルボルン大学との研究ワークショップファンダに関するセミナー出席のため、メルボルン（オーストラリア）に出張。また、1/22-1/28の間、シンポジウム“European-Japanese Cooperation Facing the Crises in Eurasia” 出席及び人間文化研究機構グローバル地域研究推進事業東ユーラシア研究関連研究打ち合わせのため、ミュンヘン（ドイツ）に出張。

安達大輔研究員は、11/29-12/5の間、“55th ASEEEES Annual Convention” 出席及びパネル発表のため、フィラデルフィア（アメリカ）に出張。また、3/9-3/15の間、OGGs プログラム（NJE3 コース）SDGs 実習実施のため、ヘルシンキ（フィンランド）に出張。

服部倫卓研究員は、11/29-12/6の間、“55th ASEEEES Annual Convention” 出席、研究報告のため、フィラデルフィア、ニューヨーク（アメリカ）に出張。

青島陽子研究員は、12/8-12/13の間、ワークショップ“Ends of Empires: Crisis and Resilience in the Long Twentieth Century” 出席のため、ロンドン（イギリス）に出張。また、2/29-3/11の間、資料調査及び研究打ち合わせのため、アスタナ、アルマトゥ（カザフスタン）に出張。

長縄宣博研究員は、12/8-12/13の間、ワークショップ“Ends of Empires: Crisis and Resilience in the Long Twentieth Century” 出席のため、ロンドン（イギリス）に出張。また、2/10-2/25の間、資料収集のため、バクー（アゼルバイジャン）に出張。

宇山智彦研究員は、12/9-12の間、国際会議“Jadids: ideas of national identity, independence and statehood” 出席及び研究報告のため、タシケント（ウズベキスタン）に出張。また、12/13-15の間、ワークショップ“Speaking a Shared Language: The Convergence of Russian Studies and China Studies in a Re-Examination of Sino-Russian Borderlands” 出席及び研究報告のため、香港に出張。

兎内勇津流研究員は、2/4-2/15の間、資料収集のため、スタンフォード（アメリカ）に出張。

[事務係]

目 次

新センター長から	1
研究の最前線	2
生存戦略研究全体集会「脱植民地を考える」開催される／ウクライナ及び隣接地域研究ユニット全体集会「Russia's War against Ukraine and the Crisis in Eurasia—Challenges for the Humanities」／夏期国際シンポジウム開催予定／生存戦略研究／スラブ・ユーラシア研究センター&メルボルン大学のジョイントセミナー開催される／日本国際問題研究所共催シンポジウム「戦間期国際秩序の形成とその変容：地域間比較と日本」の開催／サハ経済に関する国際ワークショップ／シベリアとアラスカに関わるセミナーの開催／2024年度外国人招へい教員（外国人研究員）の決定／共同研究員／専任・助教・非常勤研究員セミナー／研究会活動	
人事の動き	27
ヤスミナ・ガブランカペタノビッチ＝レジッチ氏の着任／研究員・事務職員の異動／2024年度の客員教授・准教授	
第2回 マトリョーシカ・インタビュー	30
青島 陽子 教授	
2023年秋のバルカン諸国訪問回想	35
by 野町 素己	
学界短信	39
学会カレンダー	
大学院だより	40
日本ロシア文学会若手企画賞受賞ワークショップ「〈暴力〉から問う：19-20世紀ロシア文化における暴力表象の横断的検討」開催報告	
大学院修了者の声	42
貴重な2年間 by 山田 愛実	
図書室だより	43
「チェコ文化コレクション」のご紹介	
編集室だより	45
<i>Acta Slavica Iaponica</i> / 『境界研究』	
会議	47
センター協議員会	
誰が何をどこで	47
みせらねあ	57
センターの役割分担／専任研究員消息	

2024年4月25日発行

編集	田宮彩也香、宇山智彦
発行者	長縄宣博
発行所	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 060-0809 札幌市北区北9条西7丁目 Tel.011-706-2388、706-3156 Fax.011-706-4952 インターネットホームページ： http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/
